

48.

(279)
(290)

高崎市文化財調査報告書第148集

南大類東沖・稲荷遺跡

都市計画道路南八幡京ヶ島線建設に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

高崎市教育委員会

南大類東沖・稻荷遺跡

都市計画道路南八幡京ヶ島線建設に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

高崎市教育委員会



遺跡地を南方より望む

序

高崎市は、古くから北関東の中心として重要な役目をもってきた都市です。来るべき西暦二千年には市制百周年を迎え、また21世紀に向けて各種産業・文化の発展に力を入れています。市内各所において、区画整理・都市再開発事業・道路整備事業などの基盤整備が、またそれに呼応するようビル建設、店舗、共同住宅などの建設が盛んに行われています。しかし、こうした事業が行われる中で、貴重な自然や遺跡は消滅の危機に直面し、開発に伴い遺跡が確認され発掘調査も年々増加しています。

本書で報告します南大類東沖・稻荷遺跡では、平安時代末の浅間山噴火で埋没した水田跡、古代の住居跡、それに弥生時代の方形周溝墓などが存在していました。今回発掘調査した資料が今後の地域史解明の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本遺跡の調査に多大な協力をして下さった諸機関並びに関係各位に対し、心から感謝いたします。また、寒風や猛暑の中で作業に従事して下さいました方々に御礼申し上げ、序と致します。

平成9年3月

高崎市教育委員会

教育長 砂田 威夫

例 言

- 本書は、高崎市都市計画道路南八幡・京ヶ島線建設事業に伴う高崎市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。平成7・8年度調査を合併した。
- 発掘調査期間
 - 平成7年度 平成7年11月6日～平成8年2月7日
 - 平成8年度 平成8年7月2日～平成8年10月31日
- 調査場所
 - 平成7年度 高崎市南大類町字東沖137～141
 - 平成8年度 高崎市南大類町字稲荷173～178、182～184
- 調査面積
 - 平成7年度 3118㎡
 - 平成8年度 1997㎡
- 事務局
 - 平成7年度 神戸聖語 村井田雅明 茂原久美子
 - 平成8年度 神戸聖語 村井田雅明 倉沢かおる
- 調査担当
 - 平成7年度 関口 修 神戸 肇
 - 平成8年度 斎藤寛方 鷺谷孝信
- 本書の編集は、担当者の協議の上に行い、第V章を鷺谷、関口が執筆した。
- 写真は担当者が撮影を、中村貴が遺物を撮影した。
- 表土掘削は(株)井上総合リース、基準点測量は(株)新井調査設計、自然化学分析は(株)古環境研究所、航空写真は㈱フジテクノに委託した。石材鑑定は、中村正芳氏に依頼した。
- 高崎市教育委員会遺跡番号は、南大類東沖遺跡が279、南大類稲荷遺跡が290である。
- 北マートは国家座標第IX系における座標北である。
- 調査位置図及び遺跡図は、高崎市発行2,500分の1地形図及び20,000分の1高崎市全図を使用した。
- テフラの線源火山と推定年代、遺跡略号は次の通り。
 - As-B 浅間山噴出テフラ (天仁元年、1108年)
 - As-C 浅間山噴出テフラ (推定4世紀中葉)
 - It-Fa (S) 榛名山ニツ岳噴出テフラ 6世紀初頭
 - Hr-Fp (I) 榛名山ニツ岳噴出テフラ 6世紀中葉
 - SB 掘立柱建物跡 SD 溝、礎石 SK 土坑
- 土層及び土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「標準土色帖」(1987年版)を用いた。
- 第V章の遺跡図中の観察表は以下の通りである。
 - ①竪柱 ②法量 ③色調 ④成形・調整の特徴
- 図面・遺物等は、高崎市教育委員会が保管している。

目 次

序	例言
第1章 発掘調査の実施と経過	
第1節 調査の経緯と経過	1
1.調査に至るまで	1
2.調査の経過(日誌抄)	1
南大類東沖遺跡	
南大類稲荷遺跡	
第2節 調査の方法	2
第II章 基本土層	2
第III章 立地	3
第1節 遺跡の地理的環境	3
第2節 遺跡の歴史的環境	3
第IV章 南大類東沖遺跡	5
第1節 検出した遺構と遺物	5
1.概要	5
2.弥生時代	5
3.古代	7
(1)掘立柱建物跡	7
(2)溝・土坑	13
(3)V層下水田跡	16
(4)浅間B軽石下水田跡	20
4.中近世	20
第2節 自然科学分析	23
I.南大類東沖遺跡の地質とテフラ	23
II.南大類東沖遺跡における土壌分析	25
第3節 まとめ	26
写真図版	
第V章 南大類稲荷遺跡	
第1節 検出した遺構と遺物	31
1.概要	31
2.検出した遺構と遺物	31
(1)竪穴住居跡	31
(2)溝跡	35
(3)土坑	41
(4)水田跡	49
第2節 自然科学分析	53
1.南大類稲荷遺跡における植物遺体分析	53
2.南大類稲荷遺跡から出土した炭化材の樹種同定	55

第1章 発掘調査の実施と経過

第1節 調査の経緯と経過

1. 調査に至るまで

高崎市は、関越・上信越自動車道・上越新幹線などに代表されるように、北関東における交通の拠点都市である。また近年では、市の中心部は大規模な区画整理事業が行われ再開発ビルが建設され、また郊外においては、都市基盤整備として現状線建設が進められてきた。現状線開通後は、これに沿って大型店舗がつけられ、やや離れたところではマンション建設の盛んに行われている。

本遺跡の調査原因となったのは、高崎の南に位置する南八幡地区と京ヶ島地区までをつなぐ道路建設で、環状線よりさらに外側に建設される幹線道路である。この路線については部分的には工事が終了し、既に道路として使用されている部分もあるが、全体とすると未開通部分の方が多い。

今回道路建設が計画された部分には、埋蔵文化財が存在する可能性が高く、前年度に試掘調査を行った。その結果、浅間B軽石に埋没した水田跡を確認した。高崎市教育委員会では、埋蔵文化財の取り扱いについて、担当課である都市計画部街路課と協議を重ねたが、既に事業は進行中であり、工事の変更は不可能であった。よって、高崎市教育委員会と担当課では発掘調査を行い記録を保存することで合意した。

2. 調査の経過

平成7年度(南大類東沖遺跡)

平成7年11月6日 発掘調査開始。

- 11月7日 東区掘削開始。浅間B軽石良好に残り、畦畔あり。
- 11月9日 水田面に獣足痕確認。
- 11月15日 B軽石直下で土師質土器皿出土。
- 11月21日 畦中に置き石あり。
- 11月22日 B軽石面調査終了。写真、実測開始。
- 11月28日 東区下面で遺構検出開始。
- 11月30日 洪水起源層あり、この下面を遺構検出面として調査開始。
- 12月6日 土器(8世紀)出土。水田面に後世の御旗(B軽石降下以前)あり。
- 12月7日 大畦検出。畦中に置き石あり。
- 12月14日 第三面目調査。倒木痕多し。
- 12月15日 崩潰層と見られる溝あり。
- 12月19日 東区北部三面目は、掘立柱建物跡の小ビット多い。建物跡としてまとめる。

- 平成8年1月16日 方形周溝溝、南・西・北の溝確定。1号方形周溝溝と名付ける。
- 1月18日 掘立柱建物跡19号まで確認。
- 1月29日 3・4溝図面。両者は、第二面の用水路。
- 1月30日 西区 浅間B軽石下の水田跡調査
- 2月7日 平成7年度発掘調査終了。以後整理・報告書作成開始。

平成8年度(南大類稲荷遺跡)

平成8年7月2日 現地調査開始。搬入通路づくり

- 7月3日 第1トレンチ重機による表土掘削。浅間B軽石層の地層確認。水田遺構が予想される。

- 7月12日 堆積層下より畦畔検出。
 7月18日 浅間B軽石下水田跡検出終了。翌日、航空写真撮影。
 8月1日 第1トレンチ埋戻し終了。第2トレンチ表土掘削開始。浅間B軽石層の堆積確認。
 8月9日 浅間B軽石下水田跡検出終了。
 8月20日 第2遺構面調査開始。重機による浅間B軽石下水田跡耕作土掘削。
 8月22日 遺構確認作業開始。遺構の検出状況不良。住居跡1軒、土坑、溝跡多数。
 9月12日 第2トレンチ調査終了。翌日より埋戻し。
 9月17日 第3トレンチ表土掘削開始。浅間B軽石層の堆積確認。
 9月27日 浅間B軽石下水田跡検出終了。
 10月3日 第2遺構面調査開始。重機による浅間B軽石下水田跡耕作土掘削。
 10月7日 遺構確認作業開始。堅穴住居跡3軒、土坑、溝跡多数。
 10月29日 第3トレンチ調査終了。翌日より埋戻し。
 10月31日 南大類稲荷遺跡現地作業終了。以後、断続的に整理作業及び報告書作成作業。

平成9年3月25日 報告書刊行

第2節 調査の方法

・南大類東沖遺跡（平成7年度）

発掘調査地点は、南北方向の道路部分であり幅がせまく南北に長い土地である。よって、道路の中心を基準として、東側を東区、西側を西区と名付け分割し、東区から順次調査を行うこととした。遺構の検出にあたっては、試掘調査によって浅間B軽石下の水田跡が確認されていたため、まずこの面での調査を行った。その後、洪水起源層、さらに下部の面と検出面は三面である。なお、最下部の遺構については黒土での遺構検出が不可能であり地山まで掘り下げ遺構検出を行った。

・南大類稲荷遺跡（平成8年度）

平成8年度は、対象区を3分割し北から順次調査を行った。平成7年度の調査結果を踏まえ、調査にあたっては、遺構が何面か予想されたため北から浅間B軽石面、さらにその下面と調査を行っていった。また、調査区ごとに重機で土砂を剥ぎ、残土は他の区画に置いた。なお、8年度は調査が夏場であり周囲が水田耕作を行っていることから漏水が予想された。よって、仮設電柱を設置し水中ポンプで常時排水を行った。

・平成7・8年度とも、測量にあたっては、国家座標並びに水準点を業者に測量用杭打ちを委託し、その杭からトランシットを使用し、細かく杭うち作業を行った。平面図は1/20ないし1/40の縮尺で、地層図並びにエレベーション図は1/20の縮尺とした。写真撮影は35mmリバーサル並びにモノクロームフィルムを併用した。

第二章 基本土層

次頁の図は南大類東沖遺跡及び南大類稲荷遺跡の基本土層である。I層は表土である。現在水田耕作が行われている層である。この場所は園地整備が行われおり、このI層はやや強い傾向にある。II層は、砂質の土壌で、浅間B軽石をかなり含んでいる。現水田耕作に伴う鉄分の凝集も見られる。III層は、天仁元（1108）年噴出と、史料の上から推定されているテフラの純層である（As-B）。IV層は、その下部にあるV層が腐植した層で、浅間B軽石に埋没した水田土壌である。V層は全体に灰色みを帯び黒色土ブロックを少し含むシルト質の層である。その下部のVI層とは明確に層が分界が出来る。洪水起源の可能性が高い。このV層は南大類東沖遺跡の方がより灰色を帯び、またはっきりした地層をなす。VI層は、黒褐色のシルト質の土で、上部は埋没された浅間C軽石（As-C）を含んでいる。下部は均一な粒子の細かい土である。VII層は、礫を含む黄灰色のシルト質層であり、井野川泥流表層と考えられる。

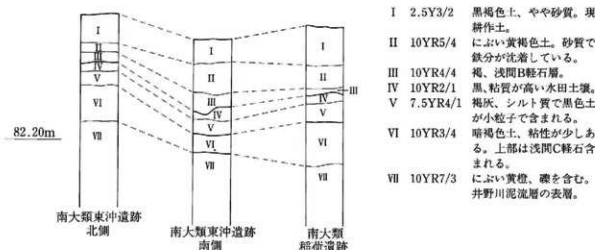


図1 基本土層図

第三章 立地

第1節 遺跡の地理的環境

南大類東沖遺跡と南大類稲荷遺跡は南北に連なる遺跡である。両遺跡は、高崎駅から東へ約3.5km、標高は地表面で83m程度である。二つの遺跡は、北の一貫堀放水路と南の一貫堀川に挟まれた土地である。一貫堀川は、遺跡地付近で小規模な河岸段丘が確認され自然河川と考えられる。それに対し、一貫堀放水路は一貫堀川から分水して、遺跡地の東1kmの地点で井野川と合流する。直線的であり人工灌漑水路とされる。遺跡地の付近は現況は水田であり、北西から南東にゆるやかに低くなっていく。両遺跡地から北0.6kmの位置には井野川が東流する。その両側はやや小高い地形が広がり集落や方形周溝墓、古墳などの遺跡が多い。遺跡地付近はそこよりやや低くなっている。

第2節 遺跡の歴史的環境

南大類東沖（1）・南大類稲荷（2）遺跡周辺の基盤は、1.1~1.3万年前に起こったとされる井野川泥流堆積物層である。付近では、旧石器時代の遺構・遺物は検出されていない。縄文時代では、井野川付近に遺構・遺物の検出例が多い。前期は南大類天神久保遺跡（3）と南大類村西遺跡（4）で、中期は南大類天田川坪遺跡、南大類万相寺遺跡（5）、矢島町村西増殿遺跡で検出されている。また、後期は南大類万相寺遺跡で発見されている。弥生時代は、南大類万相寺遺跡と南大類村西遺跡で住居跡が調査されている。古墳時代では、古墳前期の住居跡が万相寺遺跡と情報伝地遺跡（6）で、方形周溝墓が南大類村西遺跡と西浦遺跡（7）で調査されている。古墳時代後期の集落は、柴崎V遺跡、矢島町村西増殿遺跡で調査例がある。古墳は情報伝地遺跡（6）で5世紀を中心とする古墳群を、柴崎吹手B・吹手西D遺跡（8）で6世紀の横式古墳を調査している。奈良・平安の集落は飛躍的に増加する。天田川坪遺跡、天田II遺跡（9）、南大類天神久保遺跡、矢島町村西増殿遺跡、中大類金井遺跡（10）、中大類金井分遺跡（11）、柴崎V遺跡（12）などである。なお、集落以外の低地部は天仁元（1108）年噴出と推定される浅間B軽石に覆われた水田跡が広範に広がり調査例が多い。矢島前・村東遺跡（13）、山島天神遺跡（14）、柴崎遺跡群III（15）などである。中世では、南大類村西遺跡で山崎一氏が推定された大類城の北半分を調査、南大類村南遺跡（16）では、井戸跡、土蔵基、堀跡などを調査している。

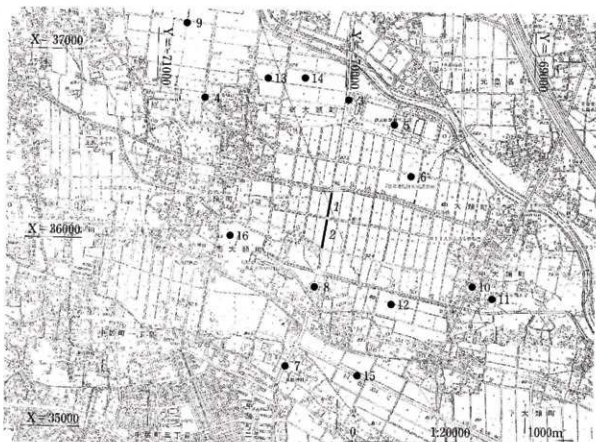


図2 周辺の道路図



図3 道路の位置図

第IV章 南大瀬東沖遺跡

第1節 検出した遺構と遺物

1. 概要

遺跡地は試掘によって、天仁元(1108)年噴出とされる浅間B軽石下水田跡の存在は確認されていた。よって調査ではこの浅間B軽石面で遺構検出を行った。この面では、近世から現代まで水路として使用されたと考えられる近世陶磁器の出土多い溝1・2を検出した。SK1は覆土に浅間B軽石が二次的に含まれる土坑である。出土遺物はないものの中世と考えられる。中世は他に遺構外ではあるが、中国青磁が出土している。浅間B軽石に埋没した水田跡は、北ずみがか畔の残りが悪く、南側は畦が高い傾向にある。また、この畦畔の残りの悪い北側は馬蹄跡が数多く発見されている。出土遺物で特筆すべきことは水田面にあって浅間B軽石に直接覆われた土師質土器である。浅間B軽石下水田跡調査後、その下部で遺構の検出を行った。下層にやや灰色を帯びた土層があった。下部の暗褐色土層とは明らかに異なる土層である。よってこの面を第2面遺構確認面とし精査した。その結果灰色土層に埋没水田跡を検出した。なお、北ずみの溝SD3とSD4の覆土も水田面を覆う土に似通っており、また洪水範囲の様相を呈した堆積であった。水路と水田が同時に存在し、この水路から溢れた洪水砂が水田跡を覆ったと考えられる。なお、この土層中及び水面からは8～9世紀の上器が出土している。この水田跡調査後、さらに下部の遺構の検出を行った。上からは第三面目である。この面では、土坑・溝・掘立柱建物跡・方形周溝墓と見られる溝を検出した。この面では報告する遺構に伴う遺物がなく時期決定がかなりむずかしい。しかし8～9世紀の遺物を伴う水田跡よりは少なくとも古い。方形周溝墓はコーナー部が切れるタイプである。このタイプは弥生時代に多く当期のものと考えられる。しかし、その他の遺構は、8～9世紀以前の縄文・弥生・古墳・古代のいずれかではあるが時期を絞り込むことは難しい。本来ならこれらは原始・古代と称すべきであるが、便宜上、本報告書は「古代」と呼んで取り扱う。

2. 弥生時代

方形周溝墓

1号方形周溝墓は東区北側で検出された。検出部分は方形周溝墓の西半分であり、東側は調査区外のため未検出である。周溝は西部、及び北・南の一部を検出した。平面形状は4隅が途切れるタイプである。出土遺物がないため時期を不詳とすべきであるが、方形周溝墓の覆土に4世紀中葉噴出とされる浅間C軽石が含まれないこと、平面形状が弥生時代に多いコーナーの途切れるタイプであることから1号方形周溝墓は弥生時代の可能性が高い。北溝は倒木痕SK9、西溝はSK12・水路SD5と重複しすべてこれより古い。

方形周溝墓の規模は南北は、周溝の外辺で12.5m、内辺で10.6m、東西は東が調査区外のため計測不可能であり不明である。北溝は幅1.2m深さ0.20m、西溝は幅0.9～1.5m、深さ0.12～0.53m南半部が深い。南溝は幅0.55m深さ0.22mである。方形周溝墓全体を検出したのでないため向きはやや誤差があるが、西周溝を基準にすると北から9度西をとる。溝の覆土は、北溝は下層及び中層に南からの土の流れが、西溝は中層にローム粒子混じりの東からの土砂の落ち込みが、また南溝は最下層に北からの土砂の崩れが見られる。土砂の落ちる方向は方形周溝墓内側からであり、方台部の盛土が崩れた底跡と考えられる。なお、方台部位置に主体部は検出されない。北・西・南溝からの遺物の出土はない。

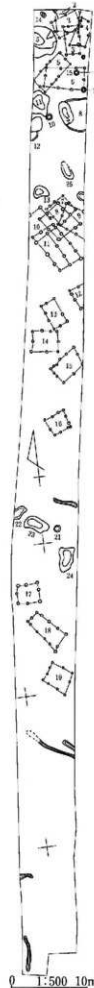


図4 最下面遺構全体図

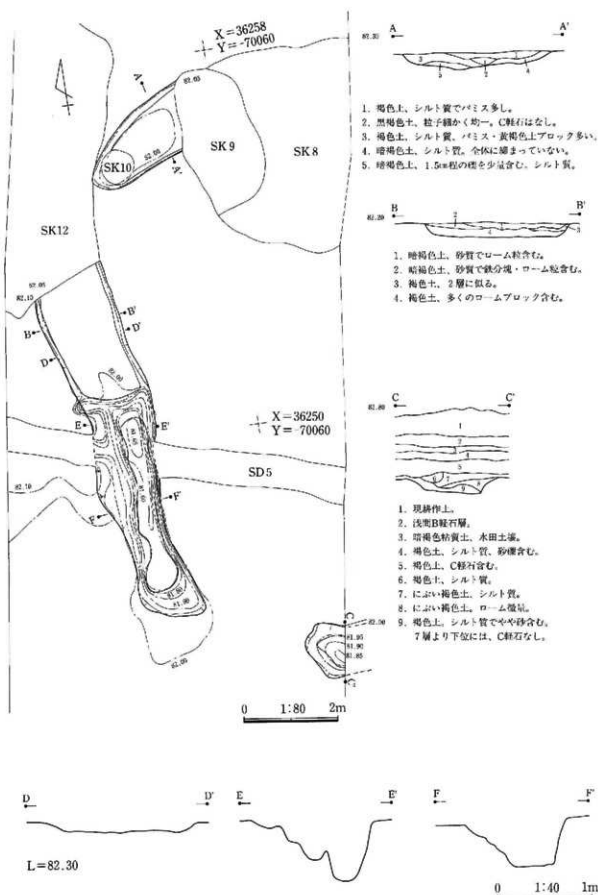


図5 1号方形竪溝断面

3 古代

(1) 掘立柱建物跡

遺構確認断面（第三面）で、土坑・溝とともにピットを多数検出した。現地での精査の結果、19棟の掘立柱建物跡がまとまった。建物跡の配置は、SB1からSB6までが北寄りであり、SB1～4、SB5・6は重複関係にある。SK8～12と名付いた倒木根のある場所から南で、SB7～16までが南にまわって存在する。SB7～11までは重複関係にあるが、SB12～16までは単独である。さらに南、ある程度の距離を置いてSB17～19が存在する。最後の3者は単独で重複はない。

SB1 ピット8個から構成される2間×2間の掘立柱建物跡である。北西隅のピットは、上層の洪水層に埋もれたSD3によって切られ、SD3より古い遺構である。建物の向きは北5度東、規模は南北方向は西で2.7m東で2.8m、東西方向は北で3.2m南で3.1mである。柱間は、ピット7と8の間が広く2.3mある。ピット1と8は1.1mと、中央柱がやや西に寄っている。南においても同様な傾向にある。それに対し、南北方向は東中央がやや北に寄るものの中央柱はほぼ中間に位置する。柱穴の規模は、直径15～35cmと小規模である。深さは1が30cmと一番深く、5・6も比較的深度。隅柱と東西側の中央柱が深い傾向である。よって、棟は東西方向と考えられる。

SB2 SK5と重複し、これよりは新しい。規模は西で2.35m、東で2.4m、北で3.6m、南で3.35mである。向きは北22度西の、2間×2間の東西棟である。北側でのピット配列は、中央ピットがやや東に、南で西にずれている。東と西では真ん中のピットはほぼ中央であるが、西では柱筋から20cm程度外に飛び出している。柱穴は、直径25～35cmで深さは西中央ピットの2が25cm、6が22cmとやや深い。他は10～15cm程度と浅い。横受けは2と6と考えられ東西方向に棟があったと推定される。

SB3 SB1・2・4と重複し、SD3に北西隅のピットを切られる。南北に長い建物跡である。規模は西で3.7m、東で3.85m、北で2.15m、南で2.18mと台

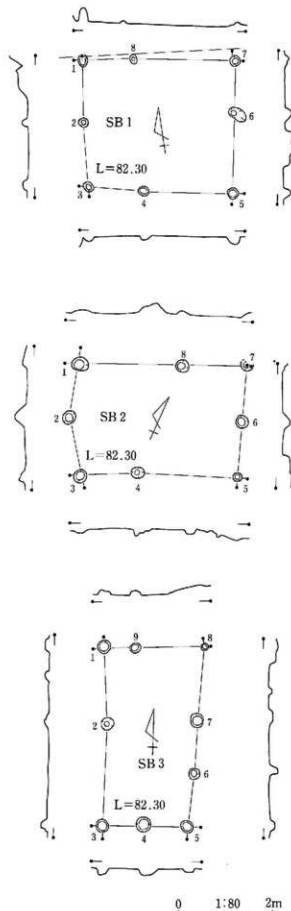
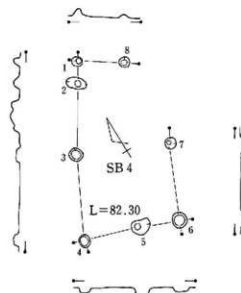


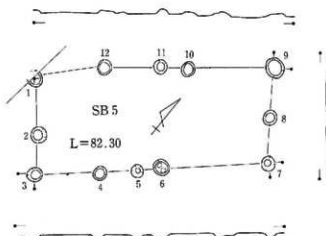
図6 掘立柱建物跡図

形を呈する。向きは北2度東、柱穴は直径25~30cm、6が深さ20cm、他は15cm程度と浅い。

SB4 SB1・2・3と重複する建物跡である。なお、北東隅は調査区外のためピットは未検出である。向きは北28度東、規模は西で3.8m、南で2.1m、南北方向中央で3.5mである。西側の柱間、たとえば3と4の間は1.8m、東側6と7の間が1.65mとやや長いのに対し、東西方向は1と8が1.0m、4と5が1.2m、5と6が0.95mと短い。なお、1と2は0.45mと極端に短く、2は隅柱である1の補強と考えられる。柱穴は直径25~35cm、深さは中央柱である5が18cm、隅柱である1が18cmとやや深い、他は10~15cmと浅い。SB1からSB4の位置は、ほぼ同一なため建て直しと考えられるが、調査では新旧関係は明らかに出来なかった。



SB5 SB6と重複関係にある、12本の柱穴から構成されるやや長い建物跡である。向きは北44度東、規模は北で5.1m、南で5.05m、西で2.0m、東で2.0mである。柱間は6から7が長く2.25m、9から10は1.8mである。それに対し3から4は1.35m、1から12は1.5m、4から5は0.8m、5から6は0.5mと柱間にばらつきが見られる。柱穴の直径は、30~35cm深さ10~20cm程度と全体的に浅い。なお、樫は2と8を結ぶ東西と考えられる。



SB6 SB5と重複している。10がSD4に切られ、これより古い。なお、側木敷SKよりピット8が新しく、この建物が側木敷より新しいことがわかる。向きは北11度東、10本の柱穴で構成される。規模は西で2.45m、南で5.3m、東で2.45m、北で5.15mである。全体に柱跡は通らず東がややよくむ長方形を呈している。柱間は3と4が2.05m、1と10が1.95m、9と10とが2.0mとかなり長い。それに対し2と3が1.45m、7と6とが1.3m、1と2、7と8はそれ

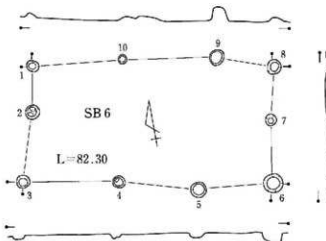
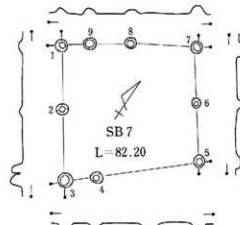


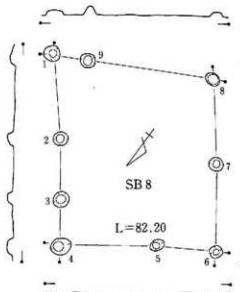
図7 掘立柱建物跡図

より短く東西方向の柱間が長い傾向にある。柱穴は直径25~40cm、深さは6が22cm、9が28cmと深いものの他は12~18cmと浅い。

SB7 1号方形周溝墓の南側で、SB8・9と重複する。9本の柱穴から構成され、向きは北64度西にとる。規模は北で2.9m、西で2.85m、南で2.95m、東で2.45mと全体的に台形である。柱間は4と5が長く2.1m、1と2は1.3m、2と3は1.5m、5と6は1.25m、6と7は1.2mと、4から5の間隔を除いて全体は短い傾向にある。南は3本構成であるのに対し北は1本多く4本構成で、1と8の間に9が追加されている。柱穴は直径22~32cm、深さは隅柱の3が28cm、7が24cmとやや深く、中央柱の6は18cm、その他は10~15cm程度と浅い。樫は2がやや浅いものの2と6を結ぶラインと推定される。



SB8 SB7・9・10・11と重複関係にある。9本の柱穴から構成される、向き北35度西の建物跡である。規模は西で3.6m、南で3.4m、東で4.1m、北で3.3mと台形を呈する。柱間は、8と9が長く2.65mある。つまり、南中央柱の9は極端に東に寄っている。また北側では5がやや西に寄る。なお、6と7の間隔は1.85m、7と8は1.85m、1と2は1.85mと長い。2と3は1.3m、3と4は1.0mと短い。柱穴は直径28~42cm、深さは5が22cm、9が22cmとやや深く、また隅柱である4が16cm、6が18cmと深い傾向にあるもの、他は10~16cmと浅い。樫は南北方向と考えられるが、9と5の柱穴位置が理解しがたく、確かな樫位置は断定出来ない。



SB9 SB7・8と重複関係にある。東側は調査区外のため不明である。向きは北33度東、規模は西で2.9m、南で3.9+αmである。全貌は知らないが、東西に長い建物跡と考えられる。柱間は1と6が2.5m、1と2が1.9mと長い。それに対し、2と3は1.15m、3と4は1.3m、4と5は1.35mと比較的短い。柱穴は直径20~32cm、深さは1が22cm、2が18cm、3が21cm、4が16cm、5が15cmであり、隅柱の1と3が深い傾向にある。樫は、2直上から東に向かうと推定される。

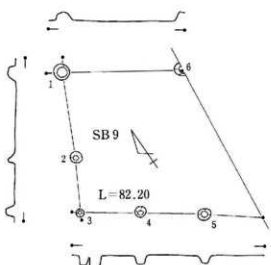
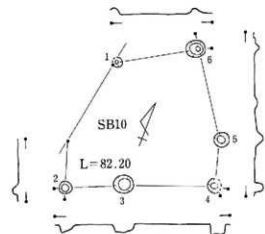
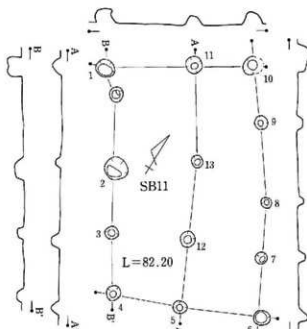


図8 掘立柱建物跡図

SB10 SB 8・11と重複する。SB10の柱穴がSB11のそれと切り合い、SB10の方が新しい。向きは北27度西、北西隅の柱穴は未検出である。柱間は2と3が1.3m、3と4が1.9m、4と5が0.95m、5と6が1.95m、1と6が1.75mと柱間の間隔はばらつきがある。東側の中央柱である5は4と6を結ぶ直線から25cmほど外に出ている。棟持ち柱と考えられる。柱穴は直径30~42cm、深さは2が15cm、3が14cm、隅柱の4が22cm、中央の5が18cmである。それに対し、6は14cm、1も12cmと浅い。棟は東西方向と推定される。



SB11 SB 8・10と重複し、SB10との柱穴の切り合いから、10号より11号の方が古い。向きは北31度西、南北に長い総柱の建物跡である。規模は西で4.35m、南で3.1m、東で5.35m、北で3.1m、中央南北は5.0mである。東西は3本ずつ、西と東は5本で構成されるが、中央は4本構成である。柱間は1と11が1.85m、5と6が1.8mと長いのにに対し、2と3は1.35m、3と4は1.3m、8と9は1.65mと南北方向の柱間が短い傾向にある。なお、ピット1の南のピットも建物構成する柱穴である。これは、隅柱の1を補強する意味と考えられる。柱穴規模は30~50cm、深さは1が33cm、2が22cm、10が28cm、6が18cmと隅柱が深い傾向にある。また、12は深さ18cm、13は12cmと、中央に並ぶ柱穴はやや規模が小さい。



SB12 SB13の東で検出した。単独であり、他の遺構との切り合いはない。東側は調査区外のため、かなりの部分が不詳である。検出された柱穴から判断すると、建物跡の向きは北26度西である。規模は西で2.75m、北で1.9~0m、他は計測不可能である。柱間は1と5で1.35m、3と4で1.45mと比較的長い。また、2と3は0.85m、1と2は0.4mと短くなっている。柱穴の規模は、直径22~28cm、深さは3が18cm、4が17cmとやや深い。それに対し1は10cm、2は13cm、5は12cmとかなり浅い。検出した柱穴が少なく、全体の形状規模は明らかにしがたく、同様に棟方向も不明である。

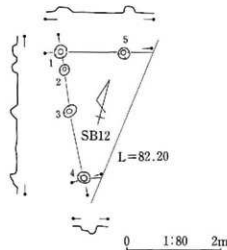
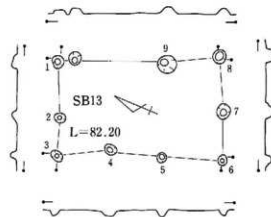
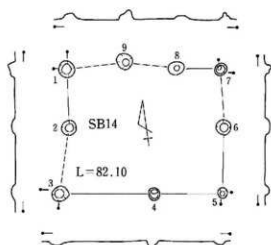


図9 掘立柱建物跡図

SB13 SB12の西、SB14の北で検出した。建物跡の向きは北23度西である。10本の柱穴から構成される南北に長い建物跡である。建物跡の規模は、西で3.5m、南で2.2m、東で3.45m、北で2.0mである。柱筋はややそろわないがほぼ長方形である。柱間は1と2が1.2m、2と3が0.8m、3と4が1.1m、4と5が1.15m、5と6が1.25m、6と7とが1.05m、7と8が1.2m、8と9が1.15mである。9と1の南の柱穴間は1.85mあり特別長い。1とその南の柱穴までは0.35mであり、建物跡の隅を補強しているものと考えられる。柱穴規模は20~28cm、深さは3が13cm、5が15cm、7が18cm、8が17cmと比較的深いものの、他は10~15cmと浅い。棟は、南北方向に長い建物跡であり、2と7を結ぶラインと考えられる。



SB14 この独立柱建物跡は、SB13の南、SB15の北側で検出した。9本の柱穴で構成される東西に長い建物跡である。向きは北3度東、規模は西で2.6m南で3.45m、東で2.6m、北で3.25mである。柱間は1-2が1.25m、2-3が1.35m、1-4が2.0m、4-5が1.45m、5-6とでは1.35m、6-7が1.25mである。北側の1-9は1.25m、8-9が1.15m、7-8は0.95mと短い。柱穴規模は直径20~38cmで、深さは1が16cm、4が16cm、7が15cm、9が21cmであるものの、他は10~12cm程度と浅い。なお、棟は東西方向と推定される。



SB15 SB14の南で検出した。11本の柱穴から構成される北東から南西に長い建物跡である。向きは北55度東、ややゆがんだ台形を呈する。規模は西で2.45m、南で3.4m、東で2.5m、北で4.15mである。西は柱穴が4本、東は3本、北は5本、南は3本と柱穴数は不規則である。柱間は、1-2が1.35m、2-3が1.1m、5-6が0.7m、7-8が1.15mである。これらに比べ、8-9は1.8m、9-10は1.55m、10-11は1.5mとやや長めである。柱穴規模は、直径25~35cm、2が18cm 7が12cm、8が17cm、10が13cm比較的深度であるが、他は8~10cm程度である。棟の方向は東西と考えられる。

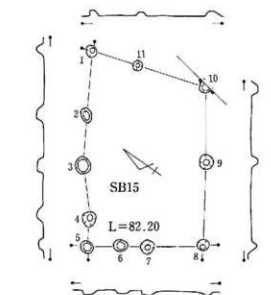
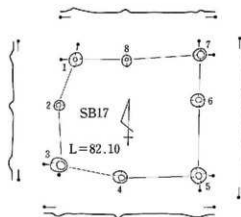
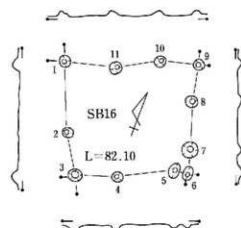


図10 掘立柱建物跡図

SB16 SB15の南で検出した。SB16の内部にはSK19、建物跡の東にはSK20があるが、同時存在かどうかは不明である。建物跡の向きは、北17度西である。11本の柱穴で構成される建物跡である。向きは、北17度西であり、規模は西で2.4m、南で2.45m、東で2.35m、北で2.85mである。全体に柱筋は通らず、柱間も不均等である。柱間は、1-2が1.5m、2-3が0.9m、1-4が0.95m、4-5が1.25m、7-8が1.0m、1-11が1.15mである。この建物跡でこれらは長めな方である。これに対し、8-9は0.8m、6-7は0.5m、5-6は0.3mでありかなり短い。柱穴規模は直径20~32cmであり、深さは1が18cm、3が16cm、深いとはいえないが他は10~12cmである。全体的に掘り込みが浅かったと考えられる。棟方向は、建物跡が東西に長いことから2と7・8を結ぶラインと見られるが、柱穴の規模や配置から棟位置を判断することはできない。



SB17 SK24の南西、SB18の北で検出した。8本の柱穴で構成される建物跡である。向きは北1度東、規模は西で2.25m、南で2.9m、東で2.6m、北で2.65mである。西側の2と南の4がやや外に飛び出した位置関係であり、不整形な台形を呈する。柱間は2-3が1.3m、3-4が1.3m、4-5が1.65m、5-6が1.6m、7-8が1.55mである。これらはやや長い部類に入る。これに対し、1-8は1.1m、1-2は1.05mとやや短い。柱穴規模は直径23~30cm、深さ9~13cmと非常に柱穴の掘り込みは浅い。ピット2は1と3を結ぶラインより外に出ており、棟持ち柱の様相を呈している。また、建物跡が東西方向にやや長いことから、棟方向は東西と考えられる。

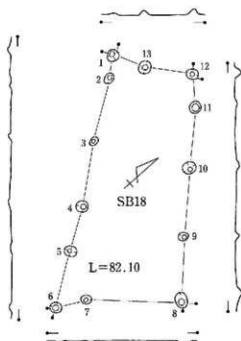


図11 掘立柱建物跡図

SB18 北にSB17、南にSB19がある。これらは、互いに単独で切り合っていない。建物跡の向きは北41度西、13本の柱穴から構成される。北西から南東にかなり長い建物跡である。規模は西で5.4m、南で2.65m、東で4.9m、北で2.65mである。平面形は細長い台形である。柱間は7-8が2.0mと長いものの、2-3は1.35m、3-4は1.4m、5-6は1.25m、8-9は1.35m、9-10は1.45m、10-11は1.3mとそれぞれ短めである。また、1-2は0.45m、11-12は0.7m、1-13は0.75mと、かなり短い。柱筋が通らず柱間も不均等である。なお、柱穴規模は直径20~25cm、12は深さ15cm、8は12cm、13は12cm、その他は8~10cmと全体的に掘り込みは浅い。

SB19 SB18の南で検出した。建物跡の向きは北38度東、10本の柱穴から構成される。北西から南東方向の建物跡である。規模は西で3.45m、南で3.05m、東で2.95m、北で2.65mである。柱間は1-2が0.85m、2-3が0.85m、3-4が0.9m、4-5が0.85m、5-6が1.35m、6-7が1.35m、7-8が1.8m、8-9が1.2m、9-10が1.4m、10-1が1.55mと7-8を除いて全体的に柱間は短い。柱穴規模は直径18~30cm、深さ8~16cmと全体的に浅い。なお、このSB19が掘立柱建物跡群の南端と考えられる。

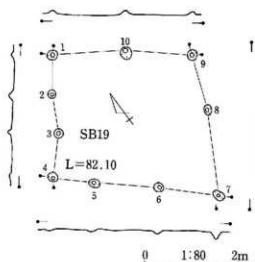


図12 19号掘立柱建物跡図

(2) 溝・土坑

東区の段下で溝は6、土坑24を検出した。V層・灰色土壌で覆われた水田跡の調査後の遺構検出である。V層下部のV1層はかなりの部分が水田土壌であり、耕作による撹拌も多い。よって、これらの遺構検出はV層上部で行っている。そのため、遺構の上部がやや傾斜していると考えられる。

溝について見ると、SB16以南のSD10・11・12などは掘り込みが浅く途中で途切れる溝である。性格はあまりはっきりしない。はっきりした溝は、図13に示した5号溝(SD5)である。方形溝溝底の西端と切り合いそれぞれ新しい。幅70~80cm、深さ20~30cmである。向きは北75度西であり、ほぼ一直線に走る。断面形はゆるやかな台形、溝の底は西が高東が低い。地層図に見られるように覆土には流紋が認められる。よって、5号溝は西から東への水路と考えられる。溝の埋没土の中に、4世紀中葉噴火とされる浅間C軽石が二次的に混じっている。また、溝の上部はV層下水田土壌である。よって、5号溝は古墳時代頃と考えられる。

土坑は北から中央付近までであるが、特に北隅に多い傾向にある。大小のばらつきが多く、また遺物が出土したものが皆無のため時期や性格を判断するのがかなり困難である。SK2は洪水土に埋没するSD3に切られる。覆土に浅間C軽石が二次的に入る。地層の様子から木は南西に倒れたと推定される。なお、この倒木痕は6号掘立柱建物跡と切り合い、倒木痕の方が古い。SK5は2号掘立柱建物跡の中央柱穴と切り合い、倒木痕の方が古い。C軽石を混じえるのは他と同様で、木は東に倒れたと推定される。SK11とSK12も倒木痕である。11は北東に、12は南西に木が倒れている。これ以外の土坑は小規模なものと、SK22~25などのやや大きいものがある。すべて埋没は自然埋没である。SK24は覆土に浅間C軽石を含まないが、他は二次的に含んでいる。

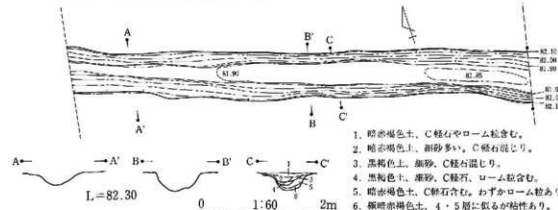


図13 5号溝図

1. 暗褐色土、C軽石やローソク痕を含む。
2. 暗褐色土、細砂多量、C軽石混入。
3. 暗褐色土、細砂、C軽石混入。
4. 暗褐色土、細砂、C軽石混入。
5. 暗褐色土、C軽石含む、わずかにローソク痕あり。
6. 暗褐色土、4・5層に似るが粘性あり、2~6層まで、混成あり。

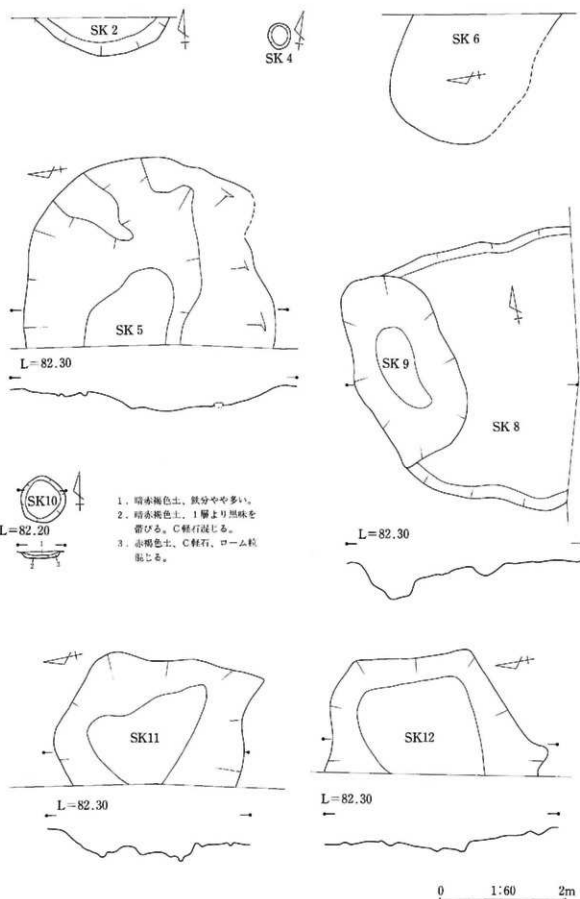


図14 最下面土坑図

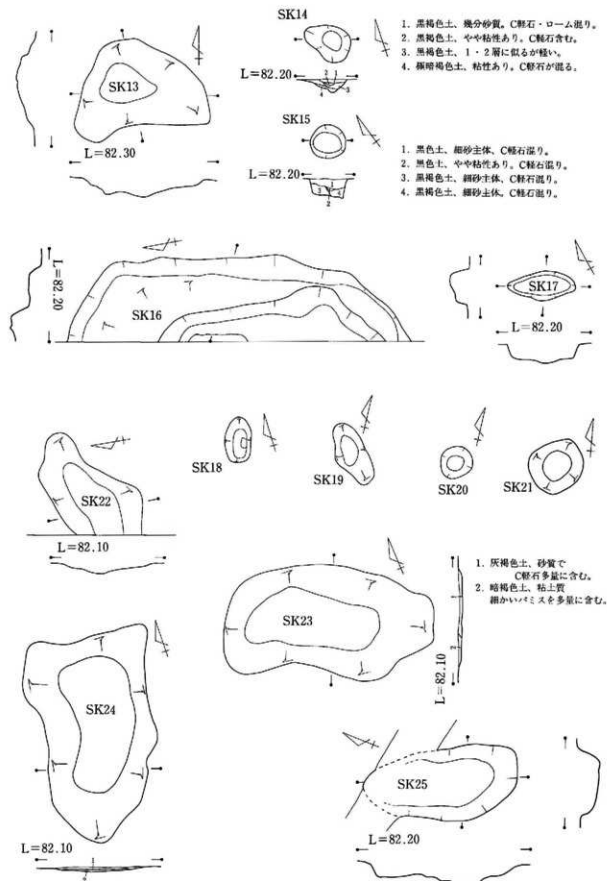


図15 最下面土坑図

(3) V層下水田跡

浅間B軽石下水田跡の調査後、下部の遺構検出を試みた。最初に北からトレンチ法で行ったが、V層・灰色土壌が遺構を覆っているとの認識がなく、下まで下げてしまった。SD3・4と1・2番水田までが空白なのはそのため、本来は水田跡があったと考えられる。V層がはっきり下部とは異なる層との検討の後、V層下の遺構を精査、水田跡を発見した。なお、水田の畦は低いため推定部分も多い。27・28番水田から30・31番水田までが空白なのは、畦を確認できなかった場所である。ここでも水田は連続していると見られる。

SD3・4の埋没土及び直上土は、水田跡を覆っているV層に似通っている。SD3は幅1.1m、深さ0.35m、土層図の6・7に流痕が見られる。また、東側が低いため東に水を流す水路と考えられる。土層図5は火山灰に近く、その上を4・3が覆っている。なお、3はV層と同一である。水路の埋没の様子は、7・6と水路が使われながら自然埋没した後、一気に洪水のような土壌が水路に沿って流れてきて、溢れた土壌が3層、つまりV層と解釈出来る。SD4は幅0.9m、深さ0.20m、溝の埋没土最下層の8層に流痕が見られ、溝底は東が低いことから東に流す水路と考えられる。この水路もSD3と同じ一気に流れ来た洪水のような層に上部が覆われている。なお、SD3地点でのV層下面は標高82.34m、SD4は82.30mである。水田跡の最北2番水田面は82.16m、最南の35番水田面は81.983mである。SD3から次第に南に向かって低くなっている。SD3とSD4は同時存在の検出した水田跡に水を送る水路であろう。

V層中及び水田面から出土した遺物を図16に示した。1は須恵器杯、外面灰色、内面底部白色で軟らかい。2は土師器杯、3はコの字口縁の土師器窪口縁部、4・5・10・11・13・14は土師器杯である。6～9、12は土師器窪の破片である。1と3は9世紀、土師器杯は8世紀、6～9、12は破片が小さく時期決定が困難であるが、薄手なので8～9世紀の範疇に入ると見られる。V層の堆積時期は土器から9世紀ころと考えられる。

水田面はかなり削平を受けており、やや凹凸はあるものの平らに近い。足跡は一部に見受けられる。北の1番水田と最南の35番水田面は約18cmの高低差があり南が低い。また、東がやや低い。水田跡の形態は方形を基調とし、畦間の距離3～6mとやや小さめである。形は三角形や台形のものもある。畦幅は0.35～0.8m程度で、特に規模の大きな浅間B軽石下水田跡に見られるような大畦畔は認められない。32番水田には畦に沿って溝があるが、溝埋没後にV層が上面を覆っている。畦中に石が埋められた置石も検出された。3番水田畦中、7番南西畦交点に2カ所、16番西畦交点、24番北西畦交点、27番南東畦交点、34番北西畦交点、35番北東畦交点に2点、35番東畦中と9カ所、10点の石である。13～18cm大の自然石で、いずれも8割程度畦に埋めている。

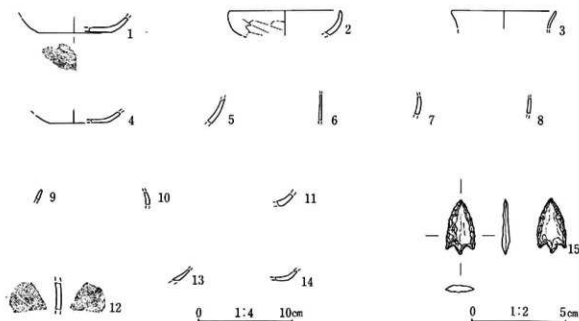
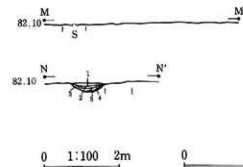
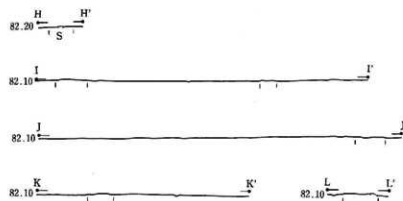
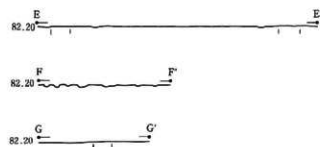
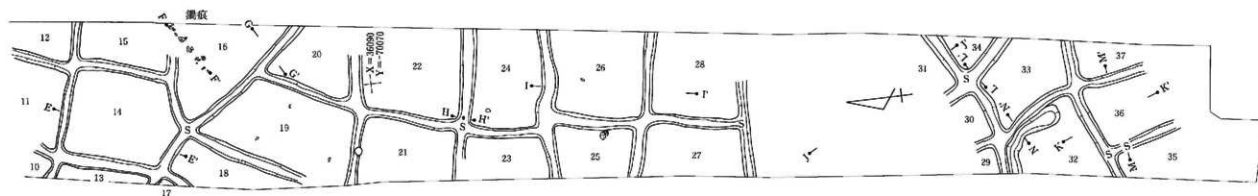
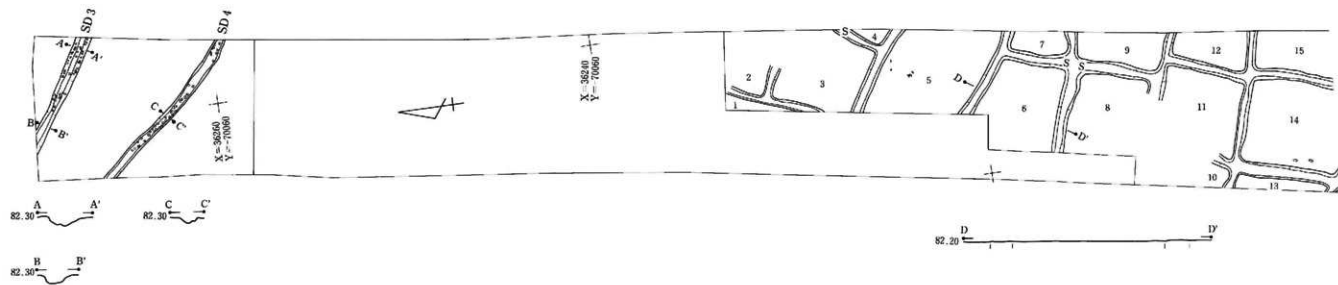


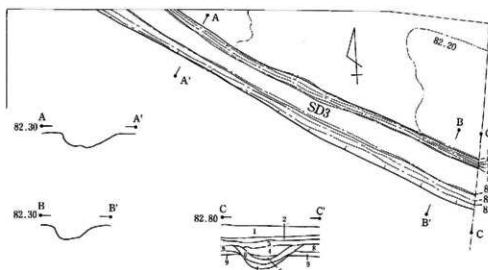
図16 V層中及び水田跡面出土遺物図



1. 灰褐色粘質土。
2. 上層に似る。やや鉄分が多い。
3. 暗褐色粘質土。
4. 灰褐色粘質土。
5. 灰褐色砂質土。



図17 V層下水田跡図



1. 表土。
2. 茶褐色土、B種石再堆積層。
3. 灰褐色土、シルト質。南の水田を覆う層に連なる。
4. 灰褐色土、灰をかなり含む。
5. 灰褐色土、Hr-1起源の洪水、もしくは二次洪水。
6. 暗褐色土、川原砂含む。やや粘性あり。
7. 暗褐色土、川原砂多い。ゆるやかな流紋。
8. 黒褐色土、上部はC種石堆積され含む。
9. 黄褐色土、シルト質、礫多い。井野川泥流表層。



1. 表土。
2. 茶褐色土、鉄分凝集。
3. B種石層。
4. 暗褐色土、水田土壌。
5. 灰褐色土、シルト質。南の水田を覆う層に連なる。
6. 灰褐色土、灰色味を帯びる。
7. 灰褐色土、洪水起源と見られる。
8. シルト主体、川原砂含む。流紋。
9. 黒褐色土、上部にC種石堆積され含む。
10. 黒褐色土、シルト質、井野川泥流表層。

図18 溝3・4及びV層下水田跡全体図



(4) 浅間B軽石下水田跡

天仁元（1108）年噴出とされる降下テフラに覆われた水田跡を検出した。テフラ下は北西から南東に下がる地形である。水田形態は三角形や台形のものが多いが、12番水田は56.1㎡、2番水田は11㎡である。また、北が水路の10番区画は東西の畦距離8.5m、東での長さ24m以上、西は14.5mであり110㎡以上ある。畦の規模は幅0.5～1.2m、高さ5～15cmとかなり差がある。断面形は上が丸い台形を呈した部分が多い。畦筋が通るのは、5・8・11・13番水田の東側の畦である。5番水田の東ではやや蛇行するが、幅1.2mとやや幅広くなっている。なお、この広い部分の上面には直径0.6m深さ0.16mのくぼみがある。10・12・13番水田の南側の東西畦も一直線である。向きは北88度西とほぼ東西を向く。幅0.9～1.1m高さ10～14cmと畦の規模も大きい。側面は立ち上がりが鋭く、畦の断面形は台形に近い。この東西畦は大畦畔と考えられる。なお、10番水田から北では、幅6～11cmの馬蹄痕が数多く見られた。下図1は須恵器甕。2は土師質土器皿で軽石に直接埋没していた。



図19 浅間B軽石下水田跡出土遺物図

4. 中近世

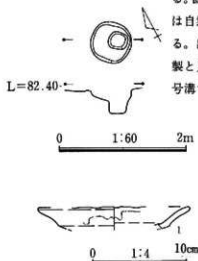


図20 1号土坑及び中世遺物図

中世と見られる遺構は東区北で検出した1号土坑である。直径0.65m深さ0.40mで2段に掘られている。埋没土は自然堆積であり、浅間B軽石が二次的に多量に含まれる。出土遺物はない。中世の遺物は遺構外であるが中国製と見られる青磁がある。近世以降の遺構は、1号・2号溝である。1号は幅0.5～0.55m、深さ4～10cm程度である。底には小さなビットが多数見受けられる。覆土は天明3（1783）年噴出とされる浅間A軽石を混じえる土である。出土遺物は陶磁器が多数ある。陶磁器は、図化はしていないが近現代までのものを含む。2号溝は幅0.8～1.1m深さ10～15cmである。凹凸の激しい掘方で底に小ビットが多数ある。1号と覆土は似ており、浅間A軽石混じりの褐色土である。出土遺物は近世から近現代までの陶磁器、磁石などがある。1号・2号とも埋没土の地層を見ると流痕が認められる。両者とも東が低く、西から東へ水を送る水路と考えられる。

図23は、出土した遺物図である。2は青磁で見込み部を彫り込んで模様としている（SD2）。3は染付碗、5も同じく染付碗の体～底部である（SD2）。4は灯明皿、内面に灰釉がかかる（SD1）。6は砥石で石材は安山岩系統と鑑定されている（SD2）。なお、これ以外にも近現代の陶磁器がかなりある。1号・2号水路は近世から近現代まで使われていた可能性が高い。

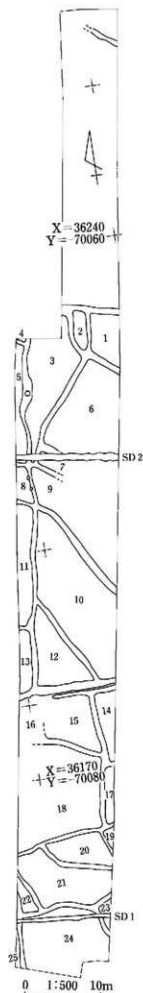


図21 浅間B軽石下水田跡全体図

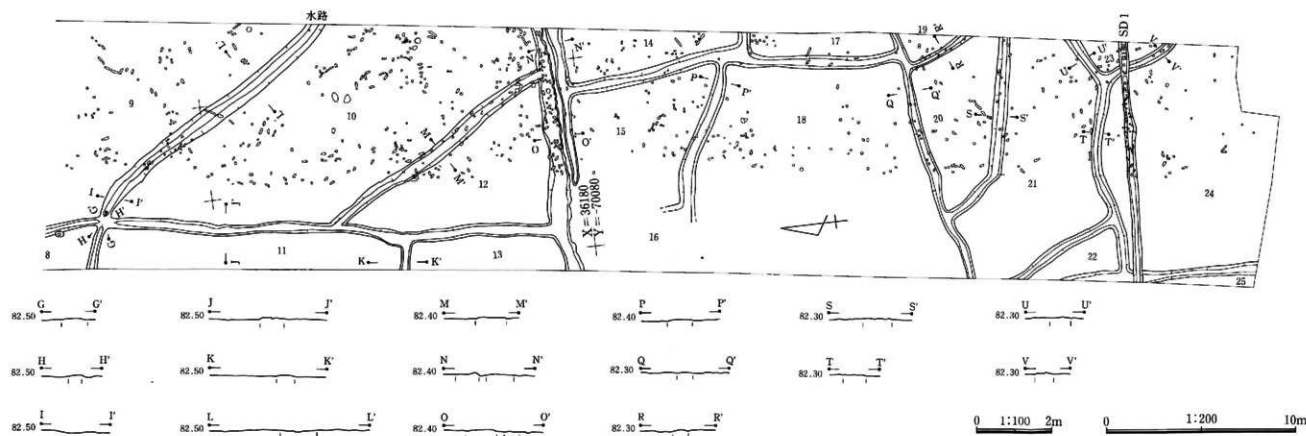
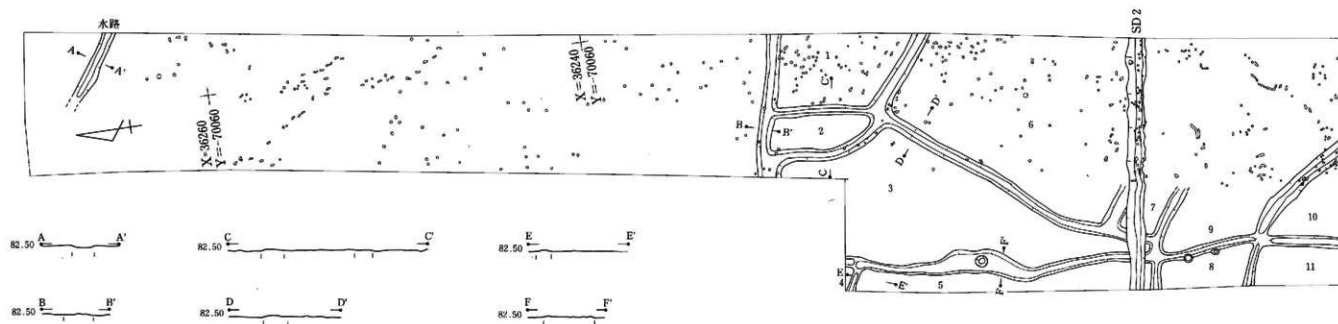


図22 浅間B軽石下水出跡図

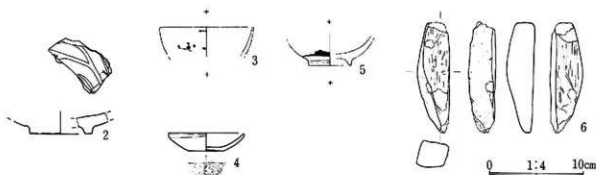


図23 1号溝及び2号溝出土遺物図

第2節 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 南大類東沖遺跡の地質とテフラ

1. はじめに

南大類東沖遺跡の発掘調査では水田遺構が検出されるとともに、高崎台地の最上部の土層の良好な断面が認められた。そこで地質調査を行い土層の層序の記載を行うと共に、テフラ検出分析を行って遺構と土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点はB地点およびA地点(SD-3)の2地点である。

2. 土層の層序

(1) B地点

ここでは、下位より灰色砂質土(層厚20cm以上)、灰色粗粒火山灰混じり黒色粘質土(層厚7cm)、灰色粗粒火山灰混じり灰色土(層厚7cm)、黒灰色粘質土(層厚9cm)、成層したテフラ層(層厚4cm)、褐色土(層厚13cm)、灰色土(層厚16cm)の連続が認められる(図1)。これらのうち灰色粗粒火山灰混じり灰色土には8~9世紀の土器が検出されており、その直下からは畦畔状遺構が検出されている。また成層したテフラ層の直下からは、水田遺構が検出されている。

成層したテフラ層は、下位より灰色細粒火山灰層(層厚0.3cm)、黄褐色粗粒火山灰層(層厚2cm)、褐色粗粒火山灰層(層厚0.7cm)、暗灰色粗粒火山灰層(層厚0.3cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚1cm)の連続から構成される。このテフラ層は、層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 新井, 1979)に同定される。したがって発掘調査により検出された水田遺構は、As-Bの降灰により埋没したものと考えられる。

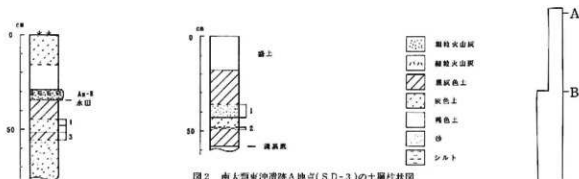


図2 南大類東沖遺跡A地点(SD-3)の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

図1 南大類東沖遺跡B地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

図24 自然化学分析土層及び資料採取点図

② A地点 (SD-3)

ここでは、下位より黒褐色土 (層厚7cm)、灰色シルト層 (層厚1cm)、黒灰色土 (層厚5cm)、灰色砂層 (層厚7cm)、黒褐色土 (層厚18cm)、盛土層 (層厚18cm) が認められる (図2)。これらのうち、灰色砂層はB地点の灰色粗粒火山灰混じり灰色土に対応するものである。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

畦畔状の遺構の構築された年代を求めるために、採取された4試料についてテフラ検出分析を行うことにした。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析結果を、表1に示す。B地点では、試料番号3にスポンジ状によく発泡した灰白色軽石 (最大径1.9mm) が比較的多く含まれている。この軽石は、その岩相から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石 (As-C, 新井, 1979) に由来すると考えられる。その上位の灰色土 (試料番号2) 中には、あまり発泡の良くない白色軽石 (最大径2.2mm) のほかに、スポンジ状によく発泡した灰白色軽石 (最大径1.2mm) が含まれている。岩相から前者は6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳流川テフラ (Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992) に、また後者はAs-Cに各々由来すると考えられる。

試料番号1には、あまり発泡の良くない白色軽石 (最大径1.3mm) のほかに、比較的多く発泡した淡褐色軽石 (最大径1.0mm) が比較的多く含まれている。岩相から前者はHr-FAに、また後者はすぐ上位にあるAs-Bに各々由来すると考えられる。

以上のことから、灰色土はHr-FA降灰後でAs-B降灰前に形成されたことがわかる。このことは含まれる土器の推定年代とも矛盾しない。一方、A地点の2試料については軽石を検出することはできなかった。

4. 小結

南大類東沖遺跡において、地質調査およびテフラ検出分析を合わせて行った。その結果、下位より浅間C軽石 (As-C, 4世紀中葉)、榛名二ツ岳流川テフラ (Hr-FA, 6世紀初頭)、浅間Bテフラ (As-B, 1108年) のテフラ層や軽石を検出することができた。南大類東沖遺跡で検出された水田遺構はAs-Bにより覆われている。またAs-Bの下位にある灰色土はHr-FAの上位でAs-Bより下位にある。8～9世紀の土器が検出されたことを合わせて考えると、その形成年代は8世紀以降で1108 (天仁元) 年以前と考えられる。

文献

- 新井 芳夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀層。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井 芳夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示部テフラ層。考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
 町田 洋・新井 芳夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
 坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳超層FA・FP層下の土器器と須磨器。群馬県教育委員会編「荒砥原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青銅遺跡」, p.103-119.
 早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。

II. 南大類東沖遺跡における土壌分析

1. 試料

試料は、B地点の試料1～3、A地点 (SD-3) の試料1の計4点である。

2. 分析方法

- 1) 土色: 生土とH₂O₂処理で有機物を分解した後の土色を、ミノルタ色彩色差計 (CR210) で計った。
- 2) pH (H2O): 風乾細土10gに脱炭水25mlを加え、pHメータで測定した。
- 3) 全炭素 (T-C), 全窒素 (T-N): エレメントールGmbHのCN測定器で分析した。
- 4) 粒径組成: 風乾細土10gを採り、6% H₂O₂で有機物を分解した後、超音波処理を行った。この試料を、pH (H2O) が4～9の範囲で1NのHClあるいは1NのNaOHで酸・アルカリ処理して粘土を分散させ、粒径組成を決定した。結果は、粗砂 (2～0.2mm)、細砂 (0.2～1.02mm)、シルト (0.02～0.002mm)、粘土 (0.002mm以下) で示した。
- 5) リン酸吸収係数: バナドモリブデン酸法で分析した。

3. 分析結果

Na	土色 (生土)	土色 (H ₂ O ₂ 処理後)	pH (H ₂ O (%))	全炭素 (%)	全窒素 (%)
B1	6.9YR2.1/0.6	9.4YR2.8/0.9	6.29	1.4	0.10
B2	7.6YR2.5/0.9	9.1YR2.9/1.1	6.54	0.6	0.06
B3	7.0YR2.3/0.8	8.3YR2.6/1.0	6.63	1.2	0.08
A1	8.0YR2.5/0.9	9.2YR3.8/2.6	6.56	1.6	0.13

Na	粒径組成 (wt%)				リン酸吸収係数 P ₂ O ₅ mg/100g
	粗砂	細砂	シルト	粘土	
B1	14.8	41.8	35.0	8.4	801
B2	18.1	40.4	33.8	7.7	787
B3	20.2	41.7	28.4	9.7	766
A1	3.7	33.2	51.8	11.3	1253

- 1) 土色: 生土は黒褐色であった。有機物分解後は、B1～B3は黒褐色であったが、A1は黄褐色であった。
- 2) 粒径組成: B1～B3は壤土(SL)であったが、A1はシルト質壤土 (SIL) とやや細粒であった。粗砂 (2～0.2mm) もA1が少なかった。
- 3) pH: 6.3～6.6と微酸性～中性であった。
- 4) T-C: 0.6～1.6%と少なかった。B2は0.6%とA1の半分以下であった。
T-N: 0.06～0.13%と少なく、T-Cとよく対応した。
- 5) リン酸吸収係数: B1～B3は800前後と低いが、A1は1250とやや高い値であった。

4. 考察

以上の結果から、B1～B3の3試料は同じ性質であり、A1はそれらに比べてやや風化が進んでいると考えられる。

第3節 まとめ

1. 縄文時代

南大瀬東沖遺跡においてV層下水田面から頁岩製の石甕が出土している。なお、縄文時代の遺構はない。

2. 弥生時代

遺構確認最下面で、方形周溝墓を1基検出した。西半部だけが調査できただけで全貌は不明であるが、方台部は10mあまりの4隅の切れるものと推定される。ただし、方形周溝墓に伴う土器は出土していない。方形周溝墓を発見した場所は、調査区の北部分であるが、井野川右岸の自然堤防の南末端である。集落や墓域と水田域の境目であろう。なお、この南で他に溝・土坑等を発見したが、弥生時代の土器を伴うものではなく、4世紀中葉に噴火したと推定される浅間C軽石を覆土に含まない土坑も1基のみで、他の土坑は全て浅間C軽石が二次的に覆土中に入っている。弥生時代の遺構は他に殆どなかったと考えられる。

3. 古代

弥生時代同様、古墳時代の土器も出土しておらず、遺構の時期を確定するのは困難である。一帯古い遺構である方形周溝墓を切る遺構には倒木痕と水路がある。倒木痕は、大きな木が台風などの大風のため、地下の土を反転させるように大きく倒れた痕跡である。倒木痕SK9・12は方形周溝墓と重複し倒木痕が周溝墓の溝を横切っている。よって、倒木痕が方形周溝墓より新しい。水路SD5は、方形周溝墓の西溝と重複しこれより新しい。SD5は流れてきた砂や土で内部が埋まっている。その上層の様子から西から東に水を流すために掘られた溝、つまり水路であることがわかる。南北約130mの調査区中、古代では唯一の水路で規模も幅70~80cmとやや大きい。この水路が水田が広がる中にあるのか、それとも水田域より少し離れているのかはわからない。しかし、この規模からすると灌漑のための水路の可能性が高い。少なくとも、5号水路より南、やや低い場所に古代の水田があった可能性が高い。2号掘立柱建物跡は5号倒木痕と重複し建物跡の方が新しい。また、6号掘立柱建物跡は6号倒木痕と重複し建物跡の方が新しい。建物跡の方が木があったのより新しい傾向をとれる。掘立柱建物跡は規模が小さく、形もややゆがんだものが多い。柱穴も小さく掘り込みの浅いものが大部分である。重量のある土庫は考えにくく、簡単な小屋程度のものであろう。これらの掘立柱建物跡を住まいのためとして使用したか、もしくは倉庫的なものかは判断できない。しかし、土器が全く出土していないのは、この場所が集落域から離れたことを示唆する。倒木痕と掘立柱建物跡は、全てその覆土に、4世紀中葉以降に降下したとされる浅間C軽石を二次的に含む。5号溝も同一である。これらの遺構の上は、洪水起源と推定されるV層に埋没した水田の土壌である。V層下水田が埋没したのは9世紀でも、水田化はそれより以前である。

4. V層下水田跡について

V層下は全域が水田域となる。畦と畦の距離が3~6m程度とやや小さな水田が広がって大畦畔は見られない。この水田には調査区北で検出されたSD3・4が大きな役割を持つ。SD3・4は水田より標高の高いところにあって、西から東に水が流れていたことが知られる。これらの水路は、V層下水田の灌漑用に掘られたものであろう。また、畦の交点に埋められた石も重要である。畦に石を埋める行為は、浅間B軽石下水田跡に例が多い。V層は、高岡村跡II、高岡東沖・村前遺跡や旭町1遺跡のまとめで述べたように、榛名山二ツ岳の二次洪水と考えられる。1997年冬現在、高岡東部の6遺跡で確認され、水田跡・畝跡・溝などを埋没させている。

5. 浅間B軽石下水田跡について

この水田跡は大畦畔を伴う。条里制による1町方格の成立と見られる。なお、調査区中央から北部分は、畦もはっきりせず馬蹄跡の検出が多い。水田として意識しなかった場所である可能性もある。

6. 水路について

調査区は南北130m、現況は水田である。水田化に伴う灌漑用の水路も古代より整備されている。古代では5号水路。9世紀のV層下では水田の一番高いところにSD3・4を、同じく浅間B軽石下でも、調査区北端に水路がある。近世～現代はSD1・2があるが、中世と考えられる水路はない。



東区最下面遺構 北から



7・11号掘立柱建物跡 北東から



方形周溝墓 北西から



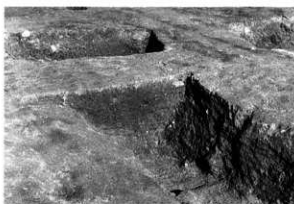
14・15号掘立柱建物跡 南西から



方形周溝墓西溝 南から



10・11号掘立柱建物跡 南東から



方形周溝墓西溝地層 南から



12・13号掘立柱建物跡 北西から



V層下水田跡 北から



畦畔と交点に埋められた石 北西から



浅間日軽石下水田跡 北から



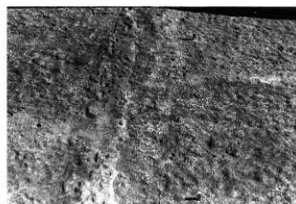
水田面の足跡 東から



V層下水田跡 南から



畦畔に埋められた石 東から



東西大畦畔 西から



足跡複写 東から



V層下水田跡 南西から



畦畔に埋められた石 西から



西区南北畦畔 北から



馬蹄跡 東から



V層下水田跡 西から



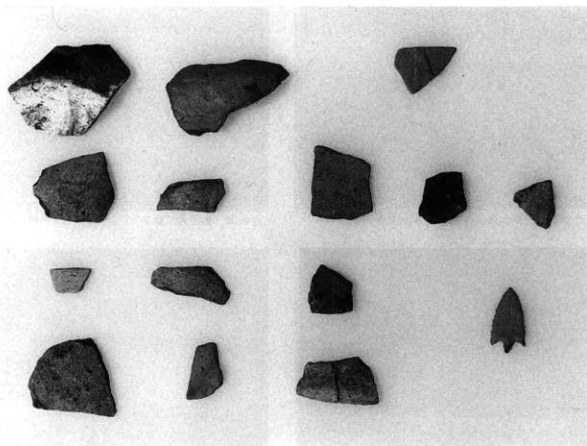
V層下水田より新しい古代の耕作痕 南西から



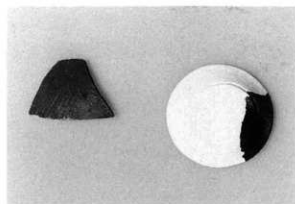
調査区北端水路 北西から



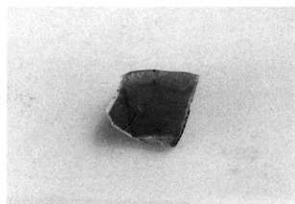
土師質土器皿出土状況 東から



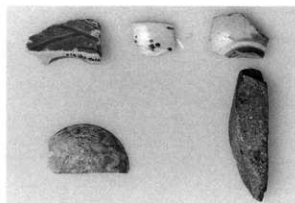
V層中及び水田面出土遺物



浅間B軽石下水田面出土遺物



遺構外中世青磁



SD1・2出土遺物

第V章 南大類稲荷遺跡

第1節 検出した遺構と遺物

1. 概要

調査対象地は前年度調査部分の南側にあたる。全てのトレンチにおいて1108(天仁元)年に降下した浅間山給瀝B軽石(以下、浅間B軽石)の堆積を確認され、軽石堆積層下より水田耕作土と思われる黒色粘質土層が検出された。また、第2、第3トレンチでは浅間B軽石下黒色粘質土層において、粒子が均一で粘性の少ない黒色土層が検出された。黒色土層下には井野川泥流に起因する洪水堆積基盤層が緩やかに上がっており、第2トレンチ中央から第3トレンチにかけて微高地の様相を呈することが確認された。従って第1遺構面を浅間B軽石堆積層下面、第2遺構面を浅間B軽石下黒色粘質土層下にみられる粒子が均一で粘性の少ない黒色土層から洪水堆積基盤層への漸移層上面とした。各トレンチとも浅間B軽石堆積層下からは畦畔や畦畔に沿った水路などが検出され、水田として耕作が行われていたと考えられる。第2、第3トレンチでは浅間B軽石下水田跡の調査終了後、重機によって浅間B軽石下水田耕作土層を掘削し、第2遺構面で調査を行った結果、竪穴住居跡4軒、溝跡28条、土坑45基が検出された。

2. 検出した遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡(SI)

第2トレンチで1軒、第3トレンチで3軒が検出された。竪穴住居跡は全て第2遺構面で検出されている。

・1号竪穴住居跡(SI1)

第2トレンチ南東端で検出された。遺構の東部分と南部分がトレンチ外となるため正確な規模について捉えることができなかった。遺構確認面からの深さは5cm程度で、壁面は下から上へ向かってやや開く。住居内施設としては住居跡北西及び南西部で主柱穴2本、南西柱穴に隣接して貯蔵穴と思われる小穴1基が検出された。主柱穴の深さは床面から10~15cm、貯蔵穴の深さは床面から17cmを測る。覆土の状況は浅間C軽石と思われる白色軽石、地山黄色粒子を少量含み、やや粘性を持つ。21号溝跡、15号土坑を切っており、調査機より新しい。第3トレンチで検出された24号溝跡と隣接するが、新旧関係については確認することができなかった。本遺構埋没後、浅間B軽石下水田が耕作されており、下限については浅間B軽石下水田耕作土とすることができる。遺物は土器片数点が出土するのみで非常に少ない。復元実測可能なものとして須恵器高台付輪、土師器甕が出土している。時期は遺物等から8世紀以降と考えられるが、詳細な時期を決定するには至らなかった。

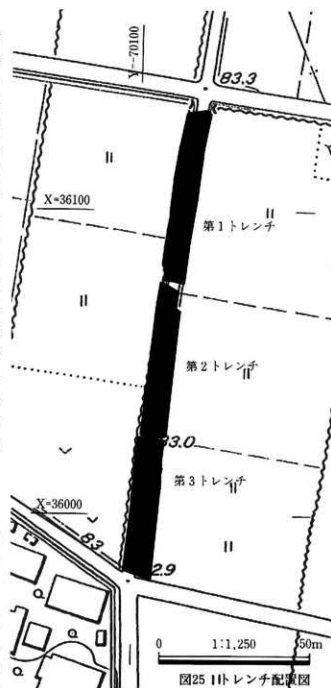


図25 1トレンチ配置図

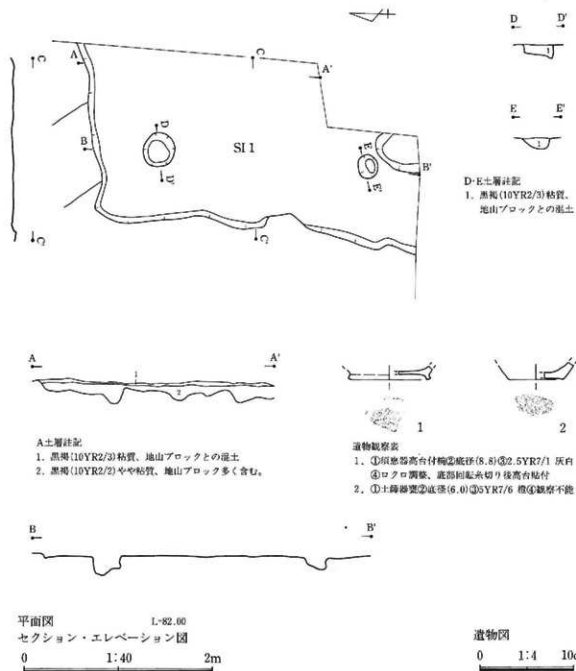
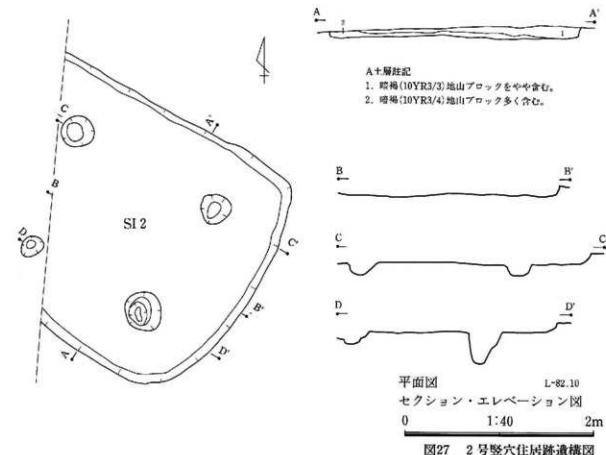


図26 1号竪穴住居跡遺構・遺物図

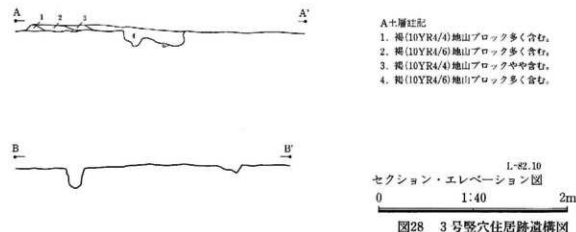
2号竪穴住居跡 (SI 2)

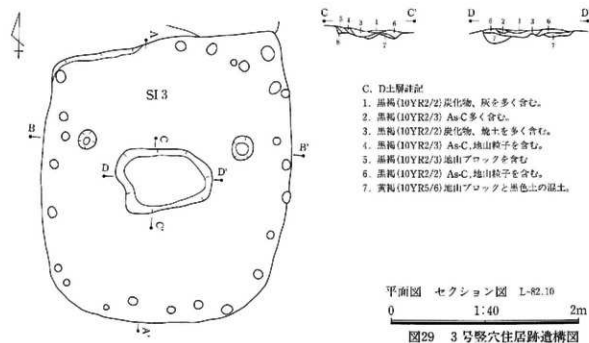
第3トレンチ北半部西端で検出された。遺構の北西角から南西部にかけてトレンチ外となるため、正確な規模について確認することができなかった。南北2.7m、遺構確認面からの深さ10cm程度で、壁面は下から上へ向かってやや開く。傾きは座標北よりN-30°Eである。平面形状は隅丸長方形を呈するものと思われる。住居内施設としては主柱穴4本が検出された。柱穴の深さは床面から15~35cmを測る。覆土の状況は浅間C軽石と思われる白色軽石、地山黄色粒子を少量含む、やや粘性を持つ。切り合う遺構はなく、隣接する遺構との新旧関係についても確認することはできなかった。本遺構埋没後、浅間B軽石下水田が耕作されており、下限については浅間B軽石下水田耕作時とすることができる。遺物は土器片数点が出土するのみで非常に少ない。遺構の詳細な時期については断定する資料に乏しい。



3号竪穴住居跡 (SI 3)

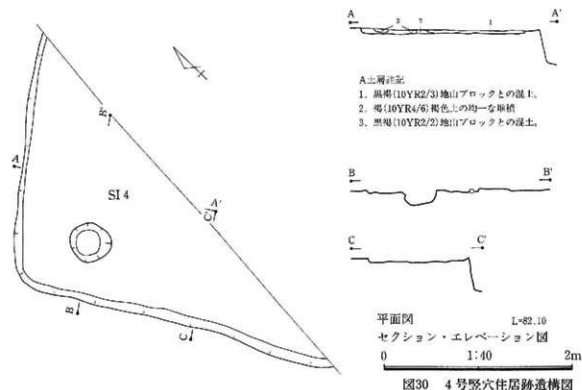
第3トレンチ中央部で検出された。遺構の大半は削平のため壁面が残っていないが、壁柱穴によってその範囲を推定することができた。規模は東西2.7m、南北3.0mと推定される。傾きは座標軸には平行する。平面形状は隅丸方形を呈する。住居内施設としては主柱穴2本、炉1基、壁内面にめぐらされていた壁柱穴と思われる小穴が検出された。主柱穴の深さは床面から8~20cmを測る。炉の規模は東西1m、南北0.7m、平面形状は不整楕円形で、深さは床面から7~14cmを測る。覆土の状況は浅間C軽石と思われる白色軽石、地山黄色粒子を少量含む。33号土坑を切っており、33号土坑より新しい。本遺構埋没後、浅間B軽石下水田が耕作されており、下限については浅間B軽石下水田耕作時とすることができる。遺物は土器片数点が出土するのみで非常に少ない。S字状口縁台付甕胴部片、古式土器壺胴部片が出土している。本遺構の時期は覆土の状況、遺物などから4世紀後半代と考えられる。





・4号竪穴住居跡 (SI 4)

第3トレンチ南半部東端で検出された。遺構の大半がトレンチ外となるため、正確な規模について捉えることができなかった。遺構確認面からの深さは5 cm程度で、壁面は下から上へ向かってやや開く。住居内施設としては主柱穴1本が検出されたのみである。主柱穴の深さは床面から14 cmを測る。覆土の状況は浅間C軽石と思われる白色軽石、地山黄色粒子を少量含む。他の遺構との切り合い関係は無い。本遺構埋没後、浅間B軽石下水田が耕作されており、下限については浅間B軽石下水田耕作時とすることができる。遺物は土器片数点が出土するのみで非常に少ない。S字状口縁台付甕腹部、口縁部片、高坏又は器台脚部片等が出土している。本遺構の時期は覆土の状況、遺物などから4世紀後半代と考えられる。



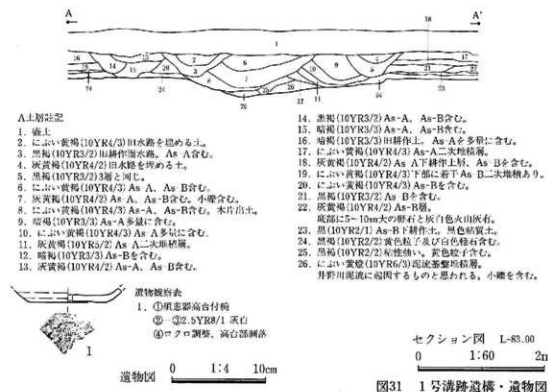
(2) 溝跡 (SD)

全トレンチを通じて、浅間B軽石下水田跡以降のもの9条、浅間B軽石下水田跡に伴うもの4条、浅間B軽石下水田耕作以前のもの15条が検出された。

① 1号溝跡

・1号溝跡 (SD 1)

第2トレンチ北部で検出された。複数の溝跡がほぼ同じ位置で重なり合っているため、規模は全体で幅5.5～6 mになる。断面による土層観察の状況から少なくとも5条の溝が重なり合っていると考えられる。覆土の状況については、全ての溝跡に1783(天明3)年降下浅間山給源A軽石(以下、浅間A軽石)が含まれている。最も古いと考えられる9～12層(下図及び土層註参照)溝跡は浅間A軽石降下によって廃絶された可能性が高い。本遺構は複数の溝跡の重複によって構成されているが、いずれの溝跡も現在の耕地整理以前の地割に深く関連した遺構と思われる。遺物としては須恵器高台付碗が出土しているが、本遺構に直接伴うものとは考えにくい。



・2号溝跡 (SD 2)

第2トレンチ南部で検出された。上幅0.8 m、下幅0.6 m、深さ11 cmで、断面形状は底部中央が若干高く、両側へ緩やかに立ち上がる。傾きは座標北よりN-33°-Wである。底部の高低差は5 cmで北西部が高く、北西から南東へ流れるものと思われる。本遺構は浅間B軽石層、浅間B軽石下水田上層を切り、覆土には浅間B軽石を多量に含む。北部で同時期の存在と思われる3号溝跡と合流する。時期は浅間B軽石降下以後で浅間A軽石降下以前と考えられるが、少量の土器片が出土するのみで断定はできない。性格は遺構の立地から見て水田耕作排水路と思われる。

・3号溝跡 (SD 3)

第2トレンチ南部で検出された。上幅0.5 m、下幅0.3 m、深さ8 cmで、断面形状は底部は概ね平坦で、両側へ緩やかに立ち上がる。傾きは座標北よりN-68°-Wである。底部は概ね平坦で高低差はみられなかった。本遺構は浅間B軽石層、浅間B軽石下水田上層を切り、覆土には浅間B軽石を多量に含む。西北部で同時期の存在と思われる2号溝跡と合流する。時期は浅間B軽石降下以後で浅間A軽石降下以前と考えられるが、少量の土器片が出土するのみで断定はできない。性格は遺構の立地から見て水田耕作排水路と思われる。

・4号溝跡 (SD4)

第2トレンチ中央部で検出された。両側を浅間B軽石下水田畔畔に挟まれている。上幅0.9m、下幅0.2m、深さ10cmで、断面形状は底部丸く、両側へ丸みをもって緩やかに立ち上がる。傾きは座標北よりN-82°Eである。底部は概ね平坦で高低差はみられなかった。本遺構は浅間B軽石によって埋没しており、その形状から浅間B軽石下水田畔畔作用排水路と考えられる。本遺構からの遺物の出土はない。

・5号溝跡 (SD5)

第2トレンチ南端と第3トレンチ北端で検出された。両側を浅間B軽石下水田畔畔に挟まれている。上幅0.9～1m、下幅0.2～0.4m、深さ10cmで、断面形状は底部やや丸みを帯び、両側へ緩やかに立ち上がる。傾きは座標北よりN-47°Wである。底部の高低差は5cmで北西部が高く、北西から南東へ流れるものと思われる。本遺構は浅間B軽石によって埋没しており、その形状から浅間B軽石下水田畔畔作用排水路と考えられる。本遺構からの遺物の出土はない。

・6号溝跡 (SD6)

第3トレンチ北端で検出された。上幅0.4m、下幅0.2m、深さ15cmで、断面形状は底部は概ね平坦で、直立気味に立ち上りU字状を出す。底部は概ね平坦で高低差はみられなかった。傾きは座標北よりN-73°Wである。本遺構は浅間B軽石層、浅間B軽石下水田畔畔を切り、覆土には浅間B軽石を多量に含む。時期は浅間B軽石降下以後で浅間A軽石降下以前と考えられるが、少量の土器片が出土するもの断定できない。性格も断定できる要素は少ないが、遺構の立地から見て水田畔畔作用排水路と思われる。

・7号溝跡 (SD7)

第3トレンチ北部で検出された。西側3分の2を浅間B軽石下水田畔畔に挟まれ、水口を挟んで東側は浅間B軽石下微高地部を流れる。上幅0.9m、下幅0.2m、深さ5cmで、断面形状は底部に若干凹凸がみられ、両側へ緩やかに立ち上がる。傾きは座標北よりN-75°Wである。底部の高低差は6cmで南東が高く、南東から北西へ流れるものと思われる。本遺構は浅間B軽石によって埋没しており、その形状から浅間B軽石下水田畔畔作用排水路と考えられる。本遺構からの遺物の出土はない。

・8号溝跡 (SD8)

第3トレンチ中央部で検出された。北半分を浅間B軽石下水田畔畔に挟まれ、南半分を浅間B軽石下水田畔畔と微高地部に挟まれる。東側中央と西側南端部には水口が設けられている。上幅1～1.3m、下幅0.2～0.6m、深さ6cmで、断面形状は底部は概ね平坦で、両側へ緩やかに立ち上がる。傾きは座標北より概ねN-10°Wで、北部で若干西寄りへ傾く。底部の高低差は3cmで北西が高く、北西から南東へ流れるものと思われる。本遺構は浅間B軽石によって埋没しており、その形状から浅間B軽石下水田畔畔作用排水路と考えられる。本遺構からの遺物の出土はない。

・9号溝跡 (SD9)

第3トレンチ中央や南寄りで検出された。上幅0.4m、下幅0.2m、深さ22cmで、断面形状は底部は概ね平坦で、直立気味に立ち上りU字状を出す。底部は概ね平坦で高低差はみられなかった。傾きは座標北よりN-73°Wである。本遺構は浅間B軽石層、浅間B軽石下水田畔畔、7号溝跡を切り、覆土には浅間B軽石を多量に含む。時期は浅間B軽石降下以後で浅間A軽石降下以前と考えられるが、遺物の出土は無く断定できない。性格も断定できる要素は少ないが、遺構の立地から見て水田畔畔作用排水路と思われる。

・10号溝跡 (SD10)

第3トレンチ南部で検出された。上幅0.3m、下幅0.2m、深さ8cmで、断面形状は底部は概ね平坦で、両側へ緩やかに立ち上がる。底部は概ね平坦で高低差はみられなかった。傾きは座標北よりN-70°Wである。本遺構は浅間B軽石層、浅間B軽石下水田畔畔、7号溝跡を切り、覆土には浅間B軽石を多量に含む。時期は浅間B軽石降下以後で浅間A軽石降下以前と考えられるが、遺物の出土は無く断定できない。性格も断定できる要素は少ないが、遺構の立地から見て水田畔畔作用排水路と思われる。

・11号溝跡 (SD11)

第3トレンチ南部で検出された。上幅0.7～1.2m、下幅0.5～0.9m、深さ7cmで、断面形状は底部は概ね平坦で幅広く、両側へ緩やかに立ち上がる。底部の高低差は3cmで北西が高く、南東から北西へトレンチ内を緩やかに蛇行しながら流れるものと思われる。本遺構は浅間B軽石層、浅間B軽石下水田畔畔を切り、覆土には浅間B軽石を多量に含む。12号溝跡と接するが、新旧関係については確認することができなかった。時期は浅間B軽石降下以後で浅間A軽石降下以前と考えられるが、遺物の出土は無く断定できない。性格も断定できる要素は少ないが、遺構の立地から見て水田畔畔作用排水路と思われる。

・12号溝跡 (SD12)

第3トレンチ南端で検出された。上幅0.3～0.6m、下幅0.1～0.3m、深さ6cmで、断面形状は底部は概ね平坦で、両側へ緩やかに立ち上がる。傾きは座標北よりN-66°Wである。本遺構は浅間B軽石層、浅間B軽石下水田畔畔を切り、覆土には浅間B軽石を多量に含む。11号溝跡と接するが、新旧関係については確認することができなかった。時期は浅間B軽石降下以後で浅間A軽石降下以前と考えられるが、遺物の出土は無く断定できない。性格も断定できる要素は少ない。

・13号溝跡 (SD13)

第3トレンチ南端で検出された。全長4.9m、上幅0.3m、下幅0.2m、最深部の深さは8cmで、断面形状は底部は丸く、両側へ丸みをもって緩やかに立ち上がる。傾きは緩やかな円弧を描くかのようにより一定でない。本遺構は浅間B軽石層、浅間B軽石下水田畔畔を切り、覆土には浅間B軽石を多量に含む。時期は浅間B軽石降下以後で浅間A軽石降下以前と考えられるが、遺物の出土は無く断定できない。性格も断定できる要素は少ない。

② 第2遺構面

・14号溝跡 (SD14)

第2トレンチ北東端で検出された。上幅0.3m、下幅0.1m、深さ6cmで、断面形状は底部は丸く、両側へ丸みをもって緩やかに立ち上がる。傾きは座標北よりN-53°Wである。底部の高低差は4cmで北西が高く、北西から南東へ流れるものと思われる。覆土の状況は浅間C軽石と思われる白色軽石、地山黄色粒子を少量含む。本遺構埋没後、浅間B軽石下水田畔畔が耕作されており、時期の下限については浅間B軽石下水田畔畔時とすることができる。遺物の出土は無く、時期、性格共に断定できる要素が少なくない。

・15号溝跡 (SD15)

第2トレンチ北部で検出された。上幅0.5m、下幅0.3m、深さ23cmで、断面形状は底部はやや丸みを帯び、立ち上がりは中位に緩やかな便を有し外側へ開く。傾きは座標北よりN-55°Wである。底部の高低差は3cmで北西が高く、北西から南東へ流れるものと思われる。覆土の状況は地山黄色粒子、細砂を含む。16号溝跡を切っており、同溝跡より新しい。後述する17号溝跡と平行し、覆土の状況も似ることから同時期の存在と考えられる。また浅間B軽石下水田畔畔より古い。遺物の出土は無く、時期、性格共に断定できる要素が少なくない。

・16号溝跡 (SD16)

第2トレンチ北部で検出された。溝北西部と中央部でそれぞれ分岐する。上幅0.2～0.5m、下幅0.1～0.3m、深さ5～10cmで、断面形状は底部は概ね平坦で、両側へ緩やかに立ち上がる。主流の傾きは座標北よりN-56°Wである。底部は概ね平坦で高低差はみられなかった。覆土の状況は細砂を多く含む。15、17号溝跡に切られており同溝跡より古い。また浅間B軽石下水田畔畔より古い。遺物の出土は無く、時期、性格共に断定できる要素が少なくない。

・17号溝跡 (SD17)

第2トレンチ北部で検出された。上幅0.4m、下幅0.3m、深さ15cmで、断面形状は丸みを帯びた箱形を呈する。傾きは座標北よりN-55°Wである。底部は概ね平坦で高低差はみられなかった。覆土の状況は地山黄色粒子、細砂を含む。16号溝跡を切っており、同溝跡と平行し、15号溝跡と平行し、覆土の状況も似ることから同時期の存在と考えられる。また浅間B軽石下水田畔畔より古い。遺物の出土は無く、時期、性格共に断定できる要素が少なくない。

• 18号溝跡 (SD18)

第2トレンチ北部で検出された。上幅0.3m、下幅0.2m、深さ3cmで、断面形状は底部は丸く、両側へ九みをもって緩やかに立ち上がる。底部の高低差は6cmで西が高く、西から東へ緩やかな円弧を描きトレンチ内を横断する。覆土の状況は地山黄色粒子を含み、やや粘性を帯びる。17号溝跡と隣接するが新旧関係について確認することはできなかった。本道構埋設後、浅間B軽石下水田が耕作されており、時期の下限については浅間B軽石下水田耕作時とすることができる。遺物の出土は無く、時期、性格共に断定できる要素が少ない。

• 19号溝跡 (SD19)

第2トレンチ中央北寄りで検出された。トレンチ西壁より東へ舌状に伸びる。上幅1.3m、下幅1.1m、深さ23cmで、断面形状は底部に凹凸がみられるが、立ち上がりは緩やかである。傾きは座標北にほぼ直行するが、東端部が南東方向に傾き伸びる。底部の高低差は8cmで東が高い。覆土の状況は地山黄色粒子を含み、やや粘性を帯びる。他の遺構との切り合いはない。本道構埋設後、浅間B軽石下水田が耕作されており、時期の下限については浅間B軽石下水田耕作時とすることができる。遺物の出土は無く、時期、性格共に断定できる要素が少ない。

• 20号溝跡 (SD20)

第2トレンチ中央部で検出された。全幅9.5mを測り、中央には2単位の溝が掘削されている。深さ45cmで、中央溝の底部は凹凸が多く、立ち上がりは南側に比べ北側が長く緩やかである。傾きは概ねN-60°Eである。底部の高低差は30cmで南が高く、南西から北東へ流れると思われる。覆土の状況は地山黄色粒子を含み、粘性に富む。13、16、17、18号土坑を切っており、これらの遺構より新しい。2号土坑と隣接するが新旧関係について確認することはできなかった。本道構埋設後、浅間B軽石下水田が耕作されており、時期の下限については浅間B軽石下水田耕作時とすることができる。遺物はS字状口縁付甕、須臾器甕等を出土するが、時期を決定するには資料が乏しい。性格としては地形変換点を利用して掘削された水路と考えられる。

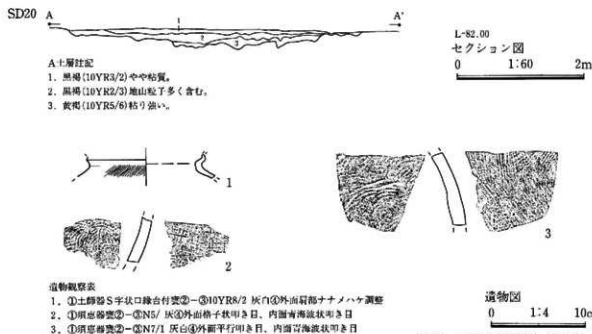


図32 20号溝跡遺構・遺物図

• 21号溝跡 (SD21)

第2トレンチ南部で検出された。全長9.7m、上幅1.8m、下幅1.6m、深さ30cmで、断面形状は底部に凹凸が多く、立ち上がりは緩やかである。覆土の状況は地山黄色粒子を含み、やや粘性を帯びる。1号堅穴住居跡、8号土坑に切られており両遺構より古く、20号土坑を切っており同遺構より新しい。本道構埋設後、浅間B軽石下水田が耕作されており、時期の下限については浅間B軽石下水田耕作時とすることができる。遺物が少量出土しているが、時期、性格共に断定できる要素が少ない。

• 22号溝跡 (SD22)

第2トレンチ南部で検出された。トレンチ西壁より南東へ舌状に伸びる。上幅0.3m、下幅0.2m、深さ7cmで、断面形状は底部は平坦で、両側へ緩やかに立ち上がる。傾きは座標北よりN-63°Wである。底部に高低差はみられなかった。覆土の状況は地山黄色粒子を含み、粘性を帯びる。他の遺構との切り合いはない。本道構埋設後、浅間B軽石下水田が耕作されており、時期の下限については浅間B軽石下水田耕作時とすることができる。遺物の出土は無く、時期、性格共に断定できる要素が少ない。

• 23号溝跡 (SD23)

第2トレンチ南端と第3トレンチ北端で検出された。全長2.5m、上幅0.7m、下幅0.4m、深さ27cmで、断面形状は東寄りが深く直立気味に立ち上がるのに比べ、西側は緩やかである。傾きは座標北よりN-22°Wである。覆土の状況は地山黄色粒子を含み、粘性を帯びる。他の遺構との切り合いはない。本道構埋設後、浅間B軽石下水田が耕作されており、時期の下限については浅間B軽石下水田耕作時とすることができる。遺物の出土は無く、時期、性格共に断定できる要素が少ない。

• 24号溝跡 (SD24)

第3トレンチ北端で検出された。トレンチ北東端より出て西へ舌状に伸びる。規模は概ね上幅2.0m、下幅1.8mを測るが、東へ向かって幅が広がっている。深さは最深部で45cmを測り、断面形状は底部は凹凸が多く、立ち上がりは北側に比べ南側が緩やかである。傾きは座標北にほぼ直交する。底部の高低差は25cmで西が高く、西から東へ流れると思われる。覆土の状況は地山黄色粒子を含み、粘性に富む。他の遺構との切り合いはない。遺構内及び周囲から7本の柱穴が検出されており、内6本は相対する位置関係にある。本道構との間に時期差はみられないことから、溝を横断する橋脚跡と考えられる。本道構埋設後、浅間B軽石下水田が耕作されており、時期の下限については浅間B軽石下水田耕作時とすることができる。遺物は上師器高杯を含む土器片少量が出土しているが、時期を決定するには資料が乏しい。性格としては微高地中央を区画する溝跡と考えられる。

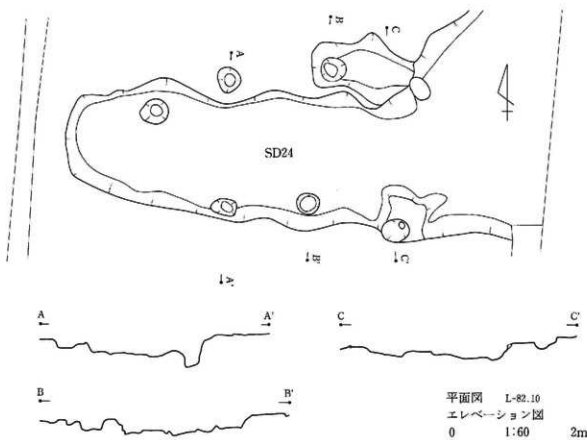


図33 24号溝跡遺構図

• 25号溝跡 (SD25)

第3トレンチ北部で検出された。トレンチ東壁より北西へ舌状に伸びる。上幅0.5m、下幅0.3m、深さ7cmで、断面形状は底部は平坦で、両側へ緩やかに立ち上がる。傾きは座標北よりN-55°Wである。底部に高低差はみられなかった。覆土の状況は地山黄色粒子を含む。他の遺構との切り合いは無い。24号溝跡、25号土坑と隣接するが断開関係については確認することができなかった。本遺構埋没後、浅間B軽石下水田が耕作されており、時期の下限については浅間B軽石下水田耕作時とすることができる。遺物の出土は無く、時期、性格共に断定できる要素が少ない。

• 26号溝跡 (SD26)

第3トレンチ中央北寄りで検出された。遺構南端を後述する27号溝跡に切られており正確な規模を捉えることはできなかったが、全長は推定で5.3m、上幅1.3m、下幅1.0m、深さ50cmで、断面形状は底部に凹凸が多くみられ、立ち上がりは比較的急で直線的である。覆土の状況は地山黄色粒子を含む。やや粘性を帯びる。切り合いから27号溝跡より古い。遺物は少量の縄文土器片が出土している。時期については縄文前期諸磯b式土器を出土する27号溝跡より古い。本遺構から出土した土器も諸磯b式期と考えられるため、時期的な差は少ないと考えられる。性格については断定できる要素が少ない。

• 27号溝跡 (SD27)

第3トレンチ中央北寄りで検出された。全長5.6m、上幅1.7m、下幅1.2m、深さ48cmで、断面形状は底部に凹凸が多くみられ、立ち上がりは比較的急で中位に稜を持つ。遺構南側にはテラス状の中段を有する。平面形状はへ字形を呈する。覆土の状況は地山黄色粒子を含む。やや粘性を帯びる。26号溝跡を切っており、同遺構より新しい。29、30、32号土坑と隣接し、29号土坑は出土遺物から同時期と考えられるが、30、32号土坑について断開関係は確認することができなかった。遺物は縄文前期諸磯b式期と思われる土器片が出土している。時期については縄文前期諸磯b式期と考えられる。性格については断定できる要素が少ない。



図34 27号溝跡遺構・遺物図

• 28号溝跡 (SD28)

第3トレンチ中央北寄りで検出された。トレンチ東壁より南西へ舌状に伸びる。上幅2.5m、下幅2.2m、深さ33cmで、断面形状は底部は平坦で、両側へ緩やかに立ち上がる。傾きは座標北よりN-55°Eである。底部の高低差については確認することができなかった。覆土には地山黄色粒子を含む。他の遺構との切り合いは無い。本遺構埋没後、浅間B軽石下水田が耕作されており、時期の下限については浅間B軽石下水田耕作時とすることができる。遺物は弥生後期横式土器甕口縁部片、土師器器底部等が出土するが、時期、性格共に断定するには資料が乏しい。

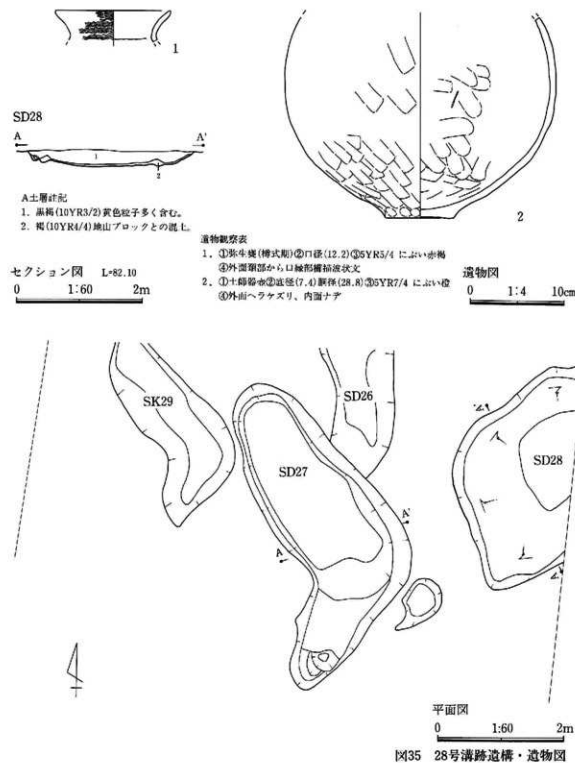


図35 28号溝跡遺構・遺物図

(3) 土坑 (SK)

第2トレンチで18基、第3トレンチで27基、計45基の土坑が検出された。いずれの土坑も第2遺構面から検出されている。45基のうち復元実測が可能な遺物が出土した土坑について個別に掲載することとし、それ以外のものについては土坑一覽表及び一覽図のみの掲載とした。

• 3号土坑 (SK3)

第2トレンチ南部で検出された。規模は2.7×2.4m、遺構確認面からの深さは最深部で24cm、平面形状は不整形で、断面形状は底部は凹凸が多く、大きな凹みが2箇所のみみられた。立ち上がりは比較的緩やかである。覆

土の状況は地山黄色ブロックと黒色土の混土である。14、20号土坑を切っており、両遺構より新しい。遺物はS字状口縁付甕口縁部片等、弥生後期式土器片が出土している。時期については遺物等から4世紀後半代と考えられるが断定はできない。本遺構の性格については、平面や断面の形状から後世の耕作等によって堅欠住居跡の床から上面が削平を受けたため、住居跡の掘り方のみが残ったものとも考えられるが、これについても断定することは難しい。

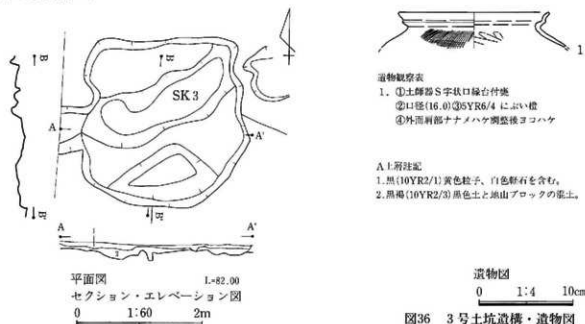


図36 3号土坑遺構・遺物図

・17号土坑 (SK17)

第2トレンチ中央南寄りで見出された。遺構の南西角がトレンチ外に、南東部は18号土坑に切られているため正確な規模を捉えることができなかったが、南北2.4mを測る。遺構確認面からの深さは13cm、平面形状は不明だが、南西角に柱状の小穴が見出された。断面形状は底部に凹凸がみられ、立ち上がりは比較的緩やかである。覆土の状況は地山黄色ブロックと黒色土の混土である。13号土坑を切っており、同遺構より新しい。18号土坑に切られており、両遺構より古い。また、本遺構埋没後に20号溝跡が掘削されており、同遺構より古い。遺物は弥生後期赤井戸式の影響を受けたと考えられる甕が出土している。時期については遺物等から4世紀前半代と考えられるが断定はできない。本遺構の性格については断定する資料に乏しい。

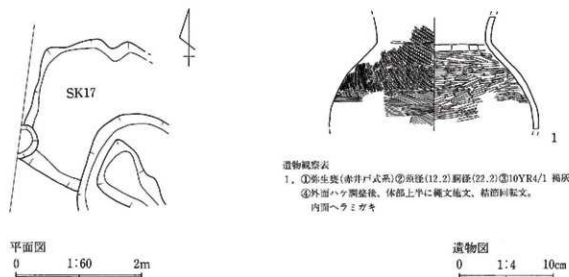


図37 17号土坑遺構・遺物図

・20号土坑 (SK20)

第2トレンチ南部で見出された。遺構の大半が切り合いのため正確な規模を捉えることができなかった。平面形状は不定形である。遺構確認面からの深さ12cm、断面形状は底部に凹凸がみられ、立ち上がりは比較的緩やかである。覆土の状況は地山黄色ブロックと黒色土の混土で、粘性に富む。切り合い関係にある全ての遺構より古い。遺物は土師器口縁部片が出土しているが、時期、性格共に断定する資料に乏しい。

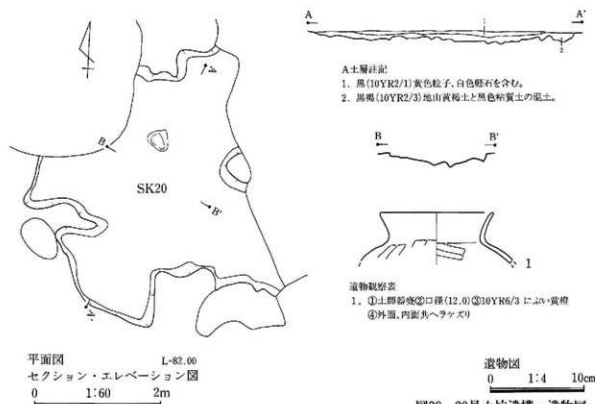


図38 20号土坑遺構・遺物図

・25号土坑 (SK25)

第3トレンチ北部で見出された。規模は3.3×1.4m、遺構確認面からの深さ25cm、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は底部に凹凸がみられ、立ち上がりは南北壁が直立気味であるのに対し、東西壁は比較的緩やかである。覆土の状況は浅間C粒石と思われる白色軽石、地山黄色粘土の他、2~40cm大の多量の自然石が含まれていた。他の遺構との切り合いはなく、24、25号溝跡、23、24、26号土坑と隣接するが、新旧関係については確認することはできなかった。遺物の出土は無い。石の配置については、大きなものに関して一部に規則的な配置を窺ったものの、全体には規則性を導き出すには至らなかった。時期、性格については断定する資料に乏しい。

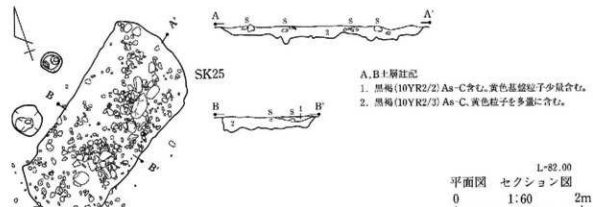
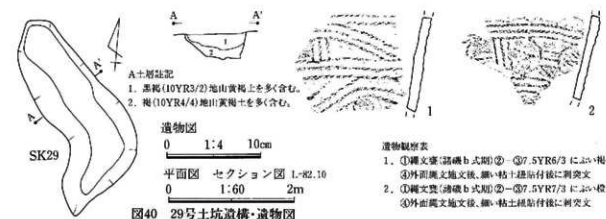


図39 25号土坑遺構図

・29号土坑 (SK29)

第3トレンチ中央部で検出された。規模は2.9×1.1m。遺構確認面からの深さ50cm、平面形状はへの字状を呈し、断面形状は底部に凹凸がみられ、立ち上がりは東壁が直立気味であるのに対し、西壁は比較的緩やかである。覆土の状況は地山黄色粒子を含み、やや粘性を持つ。他の遺構との切り合いはなく、2号堅穴住居跡、27号溝跡と隣接するが、新旧関係については確認することはできなかった。遺物は縄文前期諸磯b式期と思われる土器片が出土しており、時期については縄文前期諸磯b式期と考えられ、平面形状が27号溝跡と似ており、同様の遺構とも考えられるが、27号溝跡同様、性格については断定できる要素が少ない。



・33号土坑 (SK33)

第3トレンチ中央部で検出された。遺構南端を3号堅穴住居跡に切られているため正確な規模を捉えることはできなかったが、東西2.0m、遺構確認面からの深さ30cm、平面形状は不整形円形を呈するものと思われる。断面形状は底部に凹凸がみられや狭く、立ち上がりはテラス状の中段を持ち緩やかである。覆土の状況は浅間C軽石と思われる白色軽石、地山黄色粒子、炭化物が含まれる。特に覆土4層には植物を燃やしたと思われる灰が集中しており、灰のブランド・オパール分析の結果から稲藁を燃やしたものと推定された(第2節参照)。また同層を挟んで下層では人為的な埋戻しの様相が窺われ、上層では自然堆積の様相が窺われた。3号堅穴住居跡に切られており、同遺構より新しい。遺物の出土量は今回検出された遺構の中では本遺構が最も多い。土師器器台、高坏の他、S字状口縁付袋等が出土している。また本遺構覆土上層よりナイフ形石器が出土している。時期については遺物等から4世紀後半代と考えられる。性格については、覆土中に稲藁を集中して燃やしている点や覆土の様相から、祭祀的要素が窺われるが、断定するには資料が乏しい。



南大類稲荷遺跡 土坑一覧表

遺構名	探査番号	規模(長×幅×深さ) (単位: cm)	平面形状	検出地点	覆土の様子	遺物	備考
SK1	43	76×56×21	不整形円形	X=36030 Y=70990	10YR4/6 褐 地山ブロックとの混土	無	
SK2	43	-×-×21	-	X=36035 Y=70997	10YR2/3 黒褐 地山ブロックとの混土	無	
SK4	43	104×86×3	隅丸不整形	X=36032 Y=70996	10YR2/3 黒褐 地山ブロックとの混土	無	
SK5	43	74×30×8	不整形円形	X=36029 Y=70996	10YR5/6 黄褐 地山との混土	無	
SK6	43	50×48×10	円形	X=36029 Y=70997	10YR2/3 黒褐 地山ブロックとの混土	無	
SK7	43	-×-×6	-	X=36028 Y=70997	10YR2/3 黒褐 地山ブロックとの混土	無	
SK8	43	107×78×11	隅丸不整形	X=36027 Y=70993	10YR2/3 黒褐 地山ブロックとの混土	無	
SK9	43	72×42×7	不整形円形	X=36027 Y=70994	10YR2/3 黒褐 地山ブロックと黒色土との混土	無	
SK10	43	64×50×8	楕円形	X=36026 Y=70994	10YR2/3 黒褐 地山ブロックと黒色土との混土	無	
SK11	43	80×36×13	不整形円形	X=36026 Y=70995	10YR2/3 黒褐 地山ブロックと黒色土との混土	無	
SK12	43	76×66×18	円形	X=36027 Y=70995	10YR2/3 黒褐 地山ブロックと黒色土との混土	無	
SK13	43	-×-×6	-	X=36037 Y=70996	10YR2/3 黒褐 地山ブロックとの混土	無	
SK14	43	190×138×24	隅丸不整形	X=36033 Y=70995	10YR2/3 黒褐 地山ブロックとの混土	高坏断片、土師器片数点	
SK15	43	140×88×18	不整形円形	X=36028 Y=70993	10YR2/3 黒褐 地山ブロックとの混土	無	
SK16	43	247×140×9	不整形円形	X=36044 Y=70994	10YR2/3 黒褐 地山ブロックとの混土	無	
SK18	43	316×207×30	不整形円形	X=36037 Y=70995	10YR2/3 黒褐 地山ブロックとの混土	高坏断片、弥生後期(樽)口縁部、土師器片数点	
SK21	44	62×38×44	不整形円形	X=36010 Y=70997	10YR2/1 灰 AS-C含む	無	
SK22	44	30×42×32	不整形円形	X=36019 Y=70995	10YR3/2 黒褐 地山ブロックとの混土	無	
SK23	44	30×21×23	楕円形	X=36018 Y=70995	10YR2/3 黒褐 地山ブロックとの混土	無	
SK24	44	50×46×41	円形	X=36018 Y=70995	10YR2/2 黒褐 AS-C含む	無	
SK26	44	94×74×31	楕円形	X=36017 Y=70996	10YR3/2 黒褐 褐色土との混土	土師器片(時期不明)1点	
SK27	44	77×64×13	楕円形	X=36017 Y=70998	10YR2/3 黒褐 地山ブロックとの混土	無	
SK28	44	245×106×19	楕円形	X=36012 Y=70993	10YR3/2 黒褐 地山ブロックとの混土	無	
SK30	44	98×53×14	不整形円形	X=36006 Y=70994	10YR3/4 暗褐 地山ブロックとの混土	無	
SK31	44	42×31×8	隅丸三角形	X=36005 Y=70993	10YR4/6 褐 褐色土の均一な土	無	
SK32	44	166×100×14	隅丸長方形	X=36004 Y=70996	10YR4/6 褐 褐色土の均一な土	無	
SK34	44	46×30×34	楕円形	X=35999 Y=70998	10YR3/4 暗褐 地山ブロックとの混土	無	
SK35	44	153×108×36	楕円形	X=35999 Y=70100	10YR3/3 暗褐 褐色土の均一な土	無	
SK37	44	34×34×20	円形	X=35997 Y=70993	10YR4/6 褐 褐色土の均一な土	無	
SK38	44	43×32×8	不整形円形	X=35995 Y=70100	10YR4/6 褐 褐色土の均一な土	無	
SK39	44	64×54×8	円形	X=35995 Y=70101	10YR3/4 暗褐 褐色土の均一な土	無	
SK40	44	68×51×12	楕円形	X=35994 Y=70096	10YR4/6 褐 褐色土の均一な土	無	
SK41	44	58×42×19	不整形円形	X=35994 Y=70098	10YR4/6 褐 褐色土の均一な土	無	
SK42	44	58×34×7	楕円形	X=35992 Y=70098	10YR3/4 暗褐 褐色土の均一な土	無	
SK43	44	-×-×10	-	X=35992 Y=70101	10YR3/4 暗褐 褐色土の均一な土	無	
SK44	44	39×32×13	不整形円形	X=35991 Y=70100	10YR4/6 褐 褐色土の均一な土	無	
SK45	44	56×28×10	楕円形	X=35990 Y=70100	10YR4/6 褐 褐色土の均一な土	無	
SK46	44	187×132×26	楕円形	X=35988 Y=70096	10YR3/4 暗褐 地山ブロックとの混土	無	

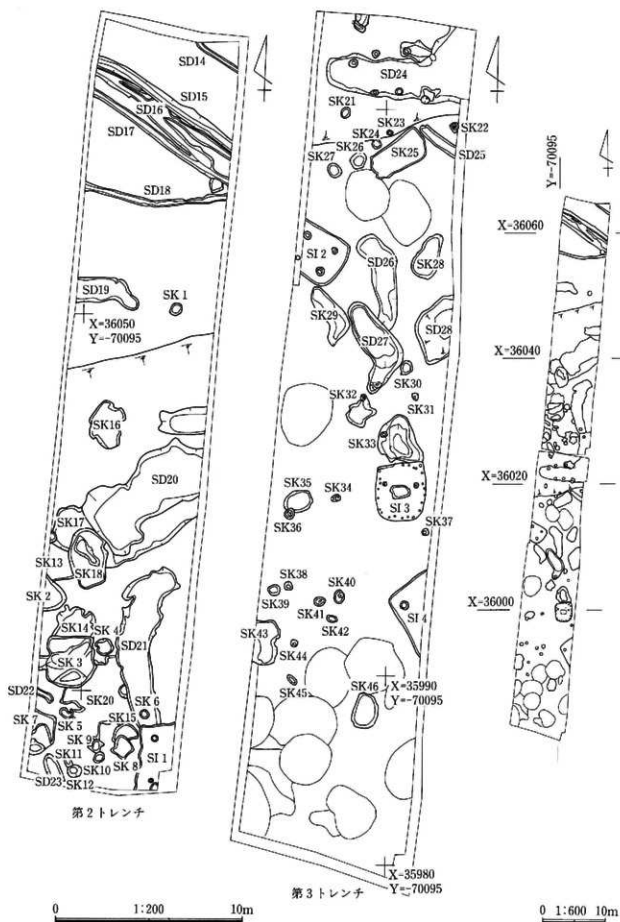
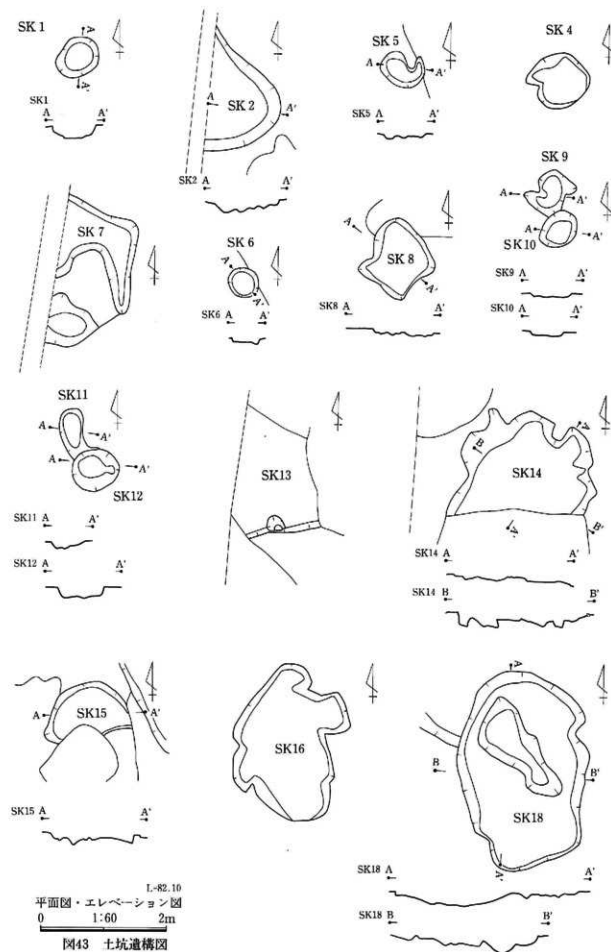
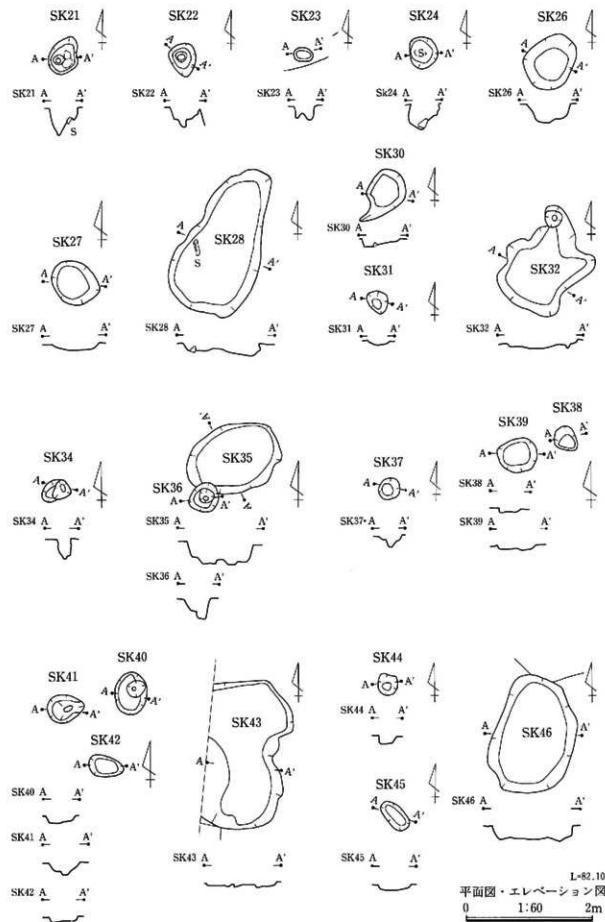


図42 第2トレンチ・第3トレンチ遺構図



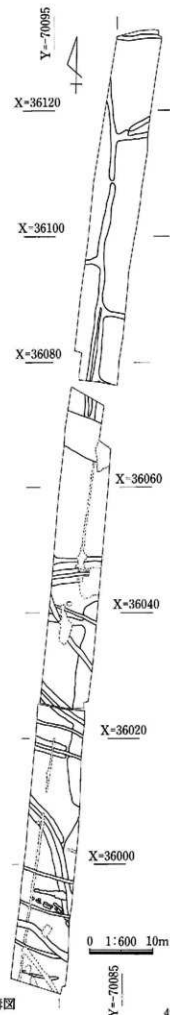


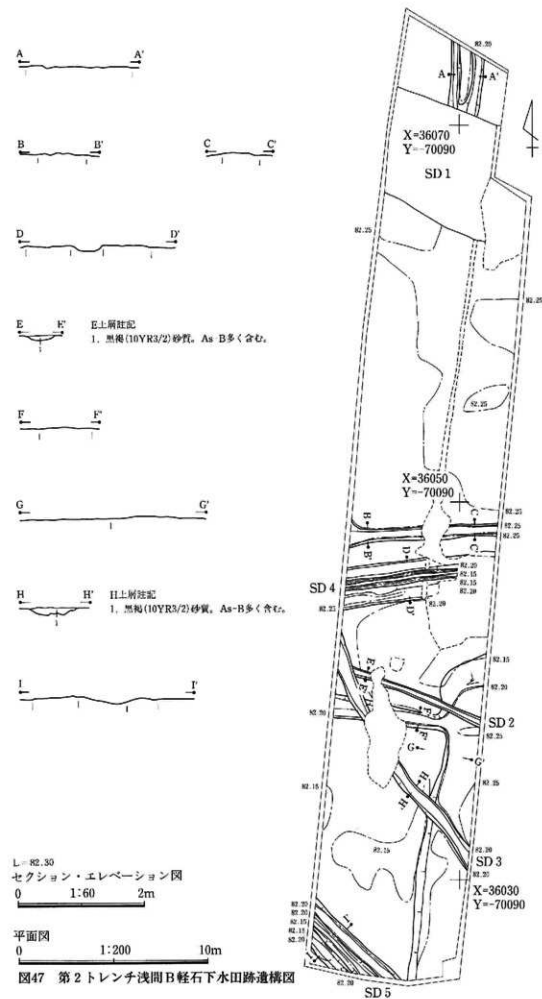
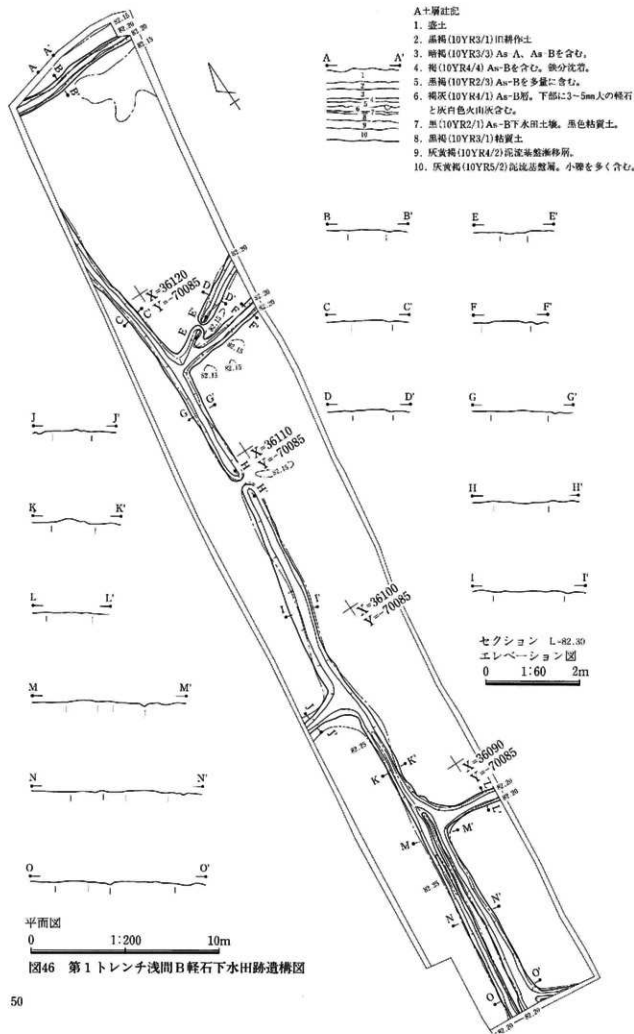
(4) 水田跡

全てのトレンチで5～10cm程度の浅間B軽石層の堆積が確認され、浅間B軽石に覆われた水川跡が検出された。遺構の検出状況は良好で、17本の畦畔と4条の水路が検出された。

- ・浅間B軽石下水山跡

第1トレンチ北端では東西へ走る畦畔が検出された。幅0.6m、高さ3cmで、傾きは座標北にはほぼ直交する。南北水田面に高低差はみられず、標高は概ね82.15mである。第1トレンチ北端西側より出てトレンチを縦断し、第2トレンチ北端まで伸びる畦畔が検出された。幅0.6~1.1m、高さ3cmで、第1トレンチ中央部には水口が設けられ、トレンチ南端で2本に分岐し、第2トレンチ北端で再び1本の畦畔となる。また、第1トレンチ中央部より出て伸びる畦畔2本と、中央南寄りで西へ伸びる畦畔と、南部と南端で東へ伸びる畦畔とが接する。分岐する畦畔の規模は北から、幅0.7m、高さ3cm、幅0.7m、高さ3cm、幅0.6m、高さ2cm、幅0.7m、高さ3cm、幅0.7m、高さ5cmである。傾きは中央の畦畔が多少分岐はするが座標北に平行し、その他の分岐する畦畔は最北と最南のものを除き座標北に直交する。最北の畦畔の傾きは座標北よりN-60°E、最南の畦畔の傾きはN 65°Wである。畦畔によって区画された水田面の高低差は南北での差は小さいが、東部水田面では3cmの高低差がみられる。中央畦畔より西側水田の標高は概ね82.20m、東側は82.15mである。第2トレンチ中央部では東西へ平行して走る畦畔3本が検出された。内南2本の畦畔に挟まれて4号溝が位置する。規模は北から幅0.7m、高さは畦畔西側で2cm、南側で3cm、幅0.6m、高さ2cm、幅0.7m、高さ2cmで、傾きは座標北よりN-82°Eである。南北水田面の高低差は5cmで、標高は北側82.25m、南側82.20mである。第2トレンチ南端中央よりでは東側微高地北向き西へ伸びる畦畔が検出された。幅0.8~1.2m、高さは北側で3cm、南側で5cmである。傾きは座標北にはほぼ直交する。南北水田面の高低差は2cmであるが、標高は双方とも概ね82.20mである。第2トレンチ南端と第3トレンチ北端では、東側微高地中央より西へ平行に伸びる2本の畦畔が検出された。2本の畦畔に挟まれて5号溝が位置する。規模は北から幅0.7m、高さ2cm、幅0.8m、高さ3cmである。傾きは座標北よりN 45°Wである。南北水田面に高低差はみられず、標高は概ね82.20mである。第3トレンチ北部では東西へ平行して走る畦畔2本が検出された。2本の畦畔はそれぞれ東側微高地と水口をもって接する。規模は北から幅0.9m、高さ3cm、幅0.6m、高さ2cmである。傾きは座標北よりN-75°Wである。南北水田面に高低差はみられず、標高は概ね82.20mである。第3トレンチ中央部から南端にかけて平行して走る畦畔2本が検出された。2本の畦畔に挟まれて8号溝が位置している。北側畦畔は東側微高地と水口をもって接する。規模は北から幅0.7m、高さ2cm、幅0.7m、高さ3cmである。両畦畔は緩やかに傾斜して走っている。畦畔を挟んで北側の水田の標高は概ね82.20mである。今回抽出された水田面の高低差は第2トレンチ中央部が最も高く、北端との高低差3cm、南端との高低差9cmである。各区域とも水田面は概ね平坦であるが、人足並りに畝足等が検出された。





1. 南人類稲荷遺跡における植物珪酸体分析

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとに微化石 (プラント・オパール) となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 1987)。

(2) 試料

試料は、SK33 (古墳時代前期) から検出された灰層 (4層) の上層と下層である。

(3) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

1) 試料の絶乾 (105℃・24時間)

2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加 (直径約40μm・約0.02g)

※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量

3) 電気灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理

4) 超音波による分散 (300W・42kHz・10分間)

5) 沈底法による微粒子 (20μm以下) 除去、乾燥

6) 封入剤 (オイキッパ) 中に分散、プレパレート作成

7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の細胞組織に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパレート1枚分の精密に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

(4) 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

細胞組織由来: イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型 (ススキ属など)、ウシクサ族、ウシクサ族 (大型)、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、タケ亜科 (未分類等)

その他: 表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、基部起源、未分類等

(5) 考察

SK33 (古墳時代前期) から検出された灰層 (4層の上層と下層) について分析を行った。その結果、両試料からイネが多量に検出された。密度は、上層で84,700個/g、下層で56,800個/gといずれも極めて高い値である。その他の分類群では、キビ族型やヨシ属などが検出されたが、いずれも少量である。

以上の結果から、これらの灰層はおもにイネの茎葉 (稲藁) に由来しているものと推定される。

参考文献

- 杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点, 植生史研究, 第2号, p.27-37.
藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 -, 考古学
と自然科学, 9, p.15-29.

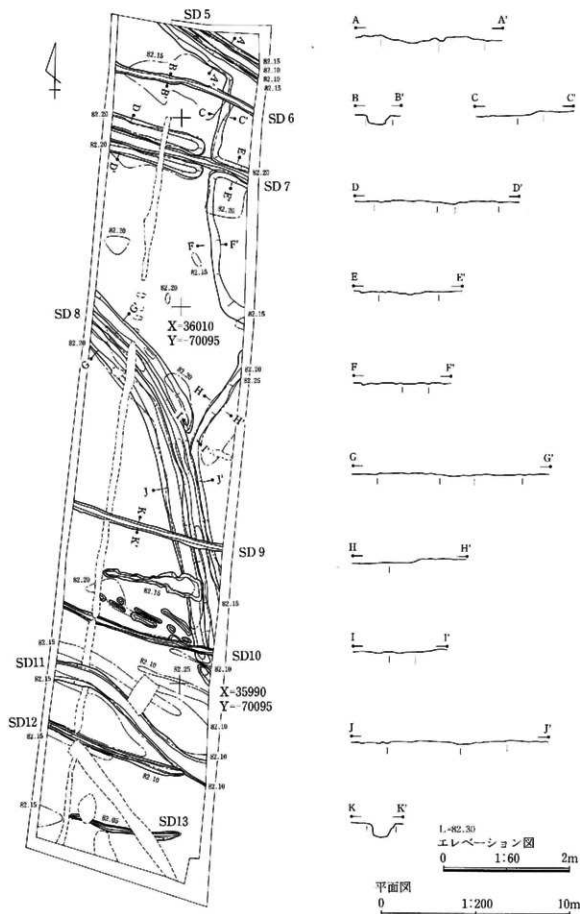


図48 第3トレンチ浅間B畦石下水田跡遺構図

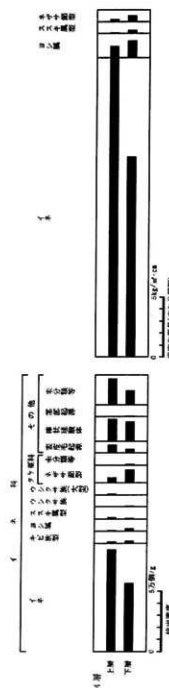
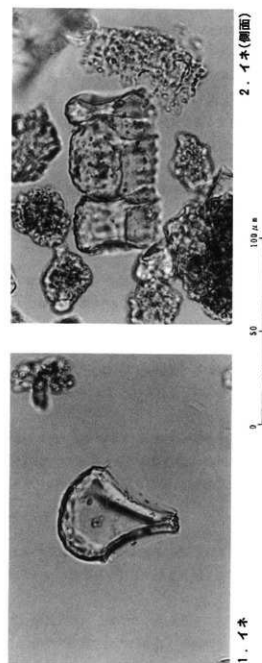


図1 南大類種荷遺跡、SK33における植物花粉分析結果

表1 南大類種荷遺跡における植物花粉分析結果

花粉種別	試料	SK33
イヌ	87	568
キハカ	15	22
スズキ	7	22
スズキ	15	7
クワカ	7	7
クワカ	44	112
クワカ	66	30
クワカ	184	184
クワカ	214	119
クワカ	1395	1085



2. イヌ(側面)

1. イヌ

2. 南大類種荷遺跡から出土した炭化材の樹種同定

(1) 試料

試料は、SK33 (古墳時代前期) から出土した炭化材である。

(2) 方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面 (木材の横断面、放射断面、接線断面) を作製し、落射顕微鏡によって75~750倍で観察した。樹種同定はこれらの試料標本をその解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(3) 結果

結果を表1に示し、同定根拠となった特徴を記す。また各断面の顕微鏡写真を示す。

試料	樹種 (和名 / 学名)
炭化材	コナラ属クヌギ節 Quercus sect. Aegilops

コナラ属クヌギ節 Quercus sect. Aegilops ブナ科

横断面: 年輪のはじめに、大型の道管が1~2列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面: 道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

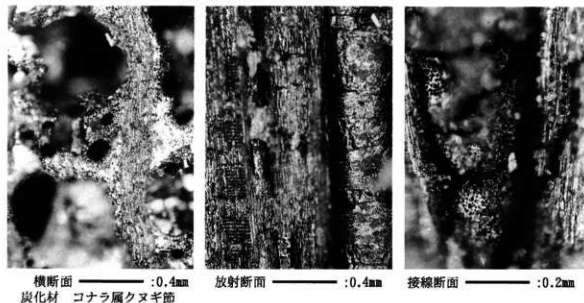
接線断面: 放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靱で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

参考文献

佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、P.49-100.

南大類種荷遺跡出土炭化材の顕微鏡写真



第3節 まとめ

今回の発掘調査は、高崎市中央部の南大類地区を南北に縦断する都市計画道路南八幡京々島線建設に伴うもので、北側を一貫堤放水路、南側を一貫堀川に挟まれた地点で行われた。高崎市街地の大部分を乗せる高崎前橋台地上には微高地と低湿地が混在し、主に微高地には集落が、低湿地には水田が展開している。今回対象となった地点においても、道路幅という限られた範囲ながら微地形の変化を捉えることができた。

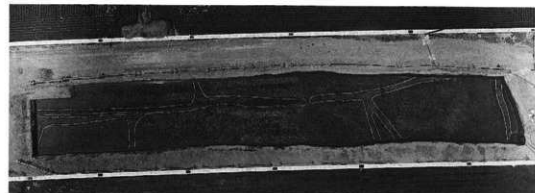
(1) 浅間B軽石下水田跡

今回対象となった全ての地点で浅間B軽石下水田跡（以下、B下水田）が検出されている。南大類東沖遺跡（以下、東沖遺跡）では東西方向の大畦畔が1本、南大類稲荷遺跡（以下、稲荷遺跡）では中央に水路を挟む大畦畔が4本検出されている。東沖遺跡の場合、本編第IV章第3節において筆者は検出された大畦畔について条里制との関連を示唆しているが、稲荷遺跡の場合、第2トレンチ北端より北部に条里制区割を窺わせる畦畔の走行がみられるが、第2トレンチ中央より南部では畦畔の走行に一定の規格を捉えることはできなかった。このことは第2トレンチ中央から第3トレンチ中央にかけて東側に微高地の高まりが検出されており、微高地の影響を少なからず受けているものと考えられる。また東沖遺跡北部では畦畔が不明瞭となり、筆者は水田として意識されなかったと推定している。稲荷遺跡においても南端にある第3トレンチ南部では畦畔が不明瞭となり、水田として機能していたのか所定することはできなかった。今回の発掘調査は道路幅という限られた範囲のものであり、本地域全体の様相を完全に把握することはできないが、少なくとも東沖遺跡北部と稲荷遺跡南部には水田が営まれなかったと推定される地域があり、稲荷遺跡南東部には微高地が広がると推定されることから、水田が営まれていた地域は本地域において狭い地域であり、また入り組む微高地に制限されて畦畔がつくられていると考えられる。条里制との関連については大畦畔による方格地割を検出または推定することができなかったこと、その他の畦畔の走行性も不規則であることなどから、今回の発掘調査の成果のみをもって断定することは危険性が高い。周辺の発掘調査成果を含めた検討が必要であると考えられる。

(2) 下層集落の展開

東沖遺跡ではB下水田下層から洪水層に覆われた水田跡、さらに下層から掘立柱建物跡を中心とする集落跡、稲荷遺跡ではB下水田下層から堅穴住居跡、土坑を中心とした集落跡が検出された。稲荷遺跡の集落跡は15、16、17号溝跡以南より遺構が検出され、20号溝跡以南より遺構検出の密度が高くなり、2号堅穴住居跡と4号堅穴住居跡を結ぶラインより南側で再び密度が下がり、46号土坑以南では倒木痕の影がみられる程度となる。15、16、17号溝跡が検出された地点は1号溝跡が検出された地点と隣接する。1号溝跡はこの地域の耕地整理以前の主要水路と考えられ、地形変換点を流れているものと考えられる。稲荷遺跡の発掘成果では、1号溝跡以南より地形が緩やかに上がりはじめ集落が展開し、以北では地形が緩やかに下がりB下水田下層においては集落は展開されていないことが確認された。東沖遺跡での下層集落は北部を中心に展開している様相が窺え、稲荷遺跡第1トレンチから東沖遺跡南部にかけては低地にあたり、東沖遺跡でB下水田下層から水田遺構が検出されたことからみても水田が展開していた可能性が高い。南部は46号土坑以南で地形が一貫堀川にむかって再び緩やかに下がりはじめると思われるが、水田遺構等は検出されていない。稲荷遺跡の発掘調査で検出された微高地は、1号溝跡以南より46号土坑以北の幅約50m程で北西から南東へ帯状に広がることが考えられる。集落展開の時期は、遺構、遺物の検出状況から縄文前期諸磯B式期には小規模ながら集落が展開していた可能性が高い。その後も弥生後期、この地域でいわゆる石田川式と呼ばれる4世紀後半代の土器を中心とする時期の遺構、遺物がみられるが、いずれの時期も突出した変化はみられず、集落展開の中心からは離れているものと考えられる。稲荷遺跡で検出された地点での集落展開の終末は8世紀以降の須恵器を出土する時期で、B下水田の開墾によって一帯が水田化されたと考えられる。下層遺構の大半がB下水田耕作による削平で検出状況は非常に悪く、また路線調査という性格上この地域の集落の全容の把握には至らなかったが、今後の周辺における発掘成果を含めて、更なる検討が必要とされる。なお本報の執筆は筆谷、土坑一覽表及び写真の編集は斎藤、図版の編集は斎藤、筆谷が行った。

写真図版



1. 第1トレンチ B軽石下水田跡航空写真



2. 作業風景（南から）



3. 調査風景（北から）



4. 第1トレンチ 馬跡（南西から）



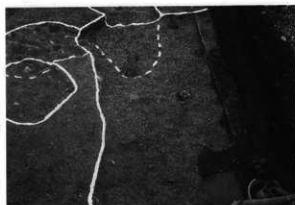
5. 第2トレンチ B軽石下水田跡（北から）



6. 第2トレンチ B軽石下水田跡（南から）



7. 第3トレンチ B軽石下水田跡（北から）



8.SI1 (南から)



9.SI2 (南から)



10.SI3 (北から)



11.SI3 炉 (北から)



12.SI3 (北から)



13.SI4 (北西から)



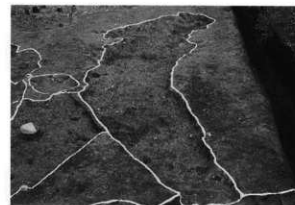
14.SD1 セクション (北から)



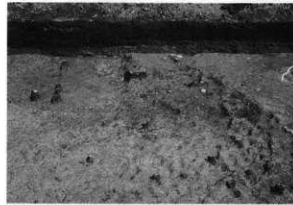
15.SD15 SD16 SD17 (西から)



16.SD14 (南から)



17.SD21 (南から)



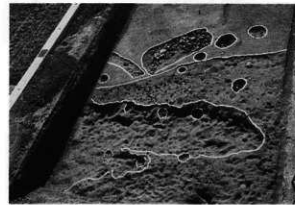
18.SD20 遺物出土状況 (西から)



19.SD28 (北から)



20.SD28 遺物出土状況 (西から)



21.SD24 (北から)



22.SK14 遺物出土状況 (西から)



23.SK18 遺物出土状況 (西から)



24. SK33 (東から)



25. SK33 灰の広がり (西から)



26. SK46 セクション (南から)



27. SK46 (南から)



28. SK25 (西から)



29. SK25 (北から)



30. 第2トレンチ 第2遺構面全景 (南から)



31. 第3トレンチ 第2遺構面全景 (北から)



SI1-1



SI1-2



SD20-1



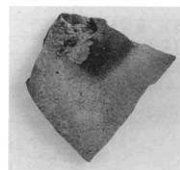
SD20-2



SD27-1



SD1-1



SD20-3



SD27-2



SD28-1



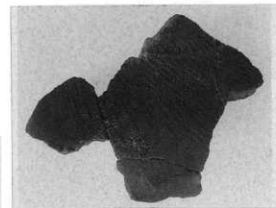
SD28-2



SK3-1



SK20-1



SK17-1



SK29-1



SK29-2



SK33-1



SK33-2



SK33-3



SK33-1

抄 録

フリガナ	ミナミオオロイヒガシオキ・イナリイセキ							
書名	南大類東沖・稲荷遺跡							
副書名	都市計画道路南八幡京ヶ島線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第148集							
編著者名	関口 修、斎藤寛方、鷺谷亨信							
発行者名	群馬県高崎市教育委員会							
所在地	群馬県高崎市高松町1番地							
発行年月日	1997年3月25日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
ミナミオオロイヒガシオキ 南大類東沖 イナリイセキ 稲荷遺跡	タカサキ 高 崎 市 ミナミオオロイマチ 南大類町 137～139 140、141 173～178 182～184			36° 19′ 23″	139° 3′ 9″	東沖遺跡 1995年11月6日 1996年2月7日 稲荷遺跡 1996年7月2日 1996年10月31日	東沖遺跡 3,118㎡ 稲荷遺跡 1,997㎡ 合 計 5,115㎡	都市計画道路 建 設
所収遺跡	時 代	種 別	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
ミナミオオロイヒガシオキ 南大類東沖 イナリイセキ 稲荷遺跡	縄文時代		溝跡2条、土坑1基		諸磯b式期(甕)			
	弥生時代	墳 墓	方形周溝墓 1基					
	古 代	集 落 跡	古墳前期 竪穴住居跡 2軒 土坑 3基		古式土師器 (S字甕、埴、壺等)			
			時期不詳 掘立柱建物跡 19軒 溝跡14条、土坑 59基					
	平安時代	水 田 跡	洪水層下水田跡 畦畔、溝跡		須恵器(坏) 土師器(坏、甕)			
			浅間B経石下水田跡 畦畔、溝跡		須恵器(甕) 土師質土器(皿)			
		集 落 跡	竪穴住居跡 1軒 土坑 1基		須恵器(高台付碗)			
	中 世			遺構外出土 中国青磁(皿)				
	近 現 代		溝 3条		青磁、染付、灯明皿 砥石			
	時期不詳	水 田 跡	竪穴住居跡 1軒 溝跡 8条					

高崎市文化財調査報告書148集

南大類東沖・稲荷遺跡

都市計画道路南八幡京々島線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成9年3月25日 印刷・発行

編集発行／高崎市教育委員会

文化財保護課埋蔵文化財係

印刷／株式会社精真社印刷

